
すべてを超える者、ディオーバー ～なぜか選ばれた姉の仮面戦闘期～

藤龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すべてを超える者、デイオーバー ―なぜか選ばれた姉の仮面戦闘期―

【Nコード】

N7045W

【作者名】

藤龍

【あらすじ】

ごく普通の世界に存在する神谷愛音は、突如現われたワームに殺されてしまう。その後、神を名乗る爺によってこの世界が「仮面ライダーの世界」と繋がったことを知った愛音は、この世界を崩壊から守るために戦うことを選び、「すべてを超える者・デイオーバー」の変身者として蘇った。

慣れない書き方ですので、読み辛いかもしれませんが、温かい目をお願いします。

序章 1（前書き）

初めての方は始めまして。

慣れない書き方ですが、暖かい目で見守ってくれば幸いです。

序章 1

(……帰りが遅い)

高校生の神谷愛音かみやアノンは弟の聖夜ノエルの帰りが遅いのを気にかけていた。

聖夜は部活に入っていない。だから学校が終わり次第、家にまっすぐ帰ってくるだろうと思っていた。

しかし、6時になっても帰ってこない。電話の一本もない。

(まさか、事故に……!)

そう思うや否や、愛音は家を飛び出した。

外は雨が降っている。愛音は傘をさし、弟の中学校までの通学路を辿った。

傘を忘れたから雨にあたって、熱を出して倒れたのかもしれない。雨の日は事故が起こりやすいからもしかしたら、と最悪の事態が次から次へと脳裏に浮かぶ。

愛音の足がだんだん速くなる。

そして前に人がいるのに気づかず、ぶつかってしまった。

「つう! ご、ごめんなさい!」

愛音は頭を下げようとしたが、その必要はないとすぐに気づいた。

「の、聖夜!!」

ぶつかったのは紛れもなく聖夜だったからだ。

「ちょっと聖夜! 何してたのよ、心配したのよ!？」

「……………」

しかし聖夜は答えない。愛音はすこし不安を顔に出した。

「聖夜、どうしたの? なんかあった?」

優しい言葉をかけると、聖夜は右手の指先を愛音の腹部に立てた。

そして、突如姿を変えた。

「え…………」

聖夜の姿は緑色のサナギに手足が生えたような形になり、愛音に当てられた指は鋭く、長い爪となって愛音の腹を突き刺した。

「ガハッ!! ……なんで…………聖夜が…ワーム…なん…か…………に…………」

そう、変貌した聖夜の姿はワームサナギ態だった。

しかし、この世界にはワームは存在しないはず。これは悪い夢に違

いない、と自分に言い聞かせたが愛音の目の前は真っ暗になった。

序章 2

愛音が目を開けると、そこは光の空間だった。

「あ、あれ……確かあたし、殺されたんじゃない……」

愛音は少しばかり混乱した。だが、すぐ目の前にいる人を見て混乱は消えた。

「……聖夜？」

そこにいた聖夜は愛音と見えない壁をはさんで立っていた。

彼は、見知らぬ爺と話していた。

そしてしばらくすると、聖夜は光の中に消えていった。

「え……何？」

「待たせたの」

見えない壁をすり抜け、先ほどまで聖夜と話していた爺が愛音に近寄った。

「あんた……誰？　ていうか聖夜をどうしたの!？」

「まず、落ち着くこと。一つずつ答えよう」

爺は「コホン」と咳払いしてから言った。

「わしは君たちが神と呼ぶ存在だ」

「神……！」

「そして聖夜は下校中に雷に打たれて死に、つい先ほどわしが彼をドラクエの世界へ送ったのだ」

「いや……なんで？」

「……今、全世界は崩壊の危機を間近に迎えている。そしてそれを止められるのは今のところ彼だけなのだよ」

「他の人たちは採用しないの……？」

「したのだが……恥ずかしいことに能力を乱用しおつての。彼も同じなら、もうどうすれば……」

神は恥ずかしそうに頭をかいて言った。

「……ところで、どうしてあたしはここに呼ばれたの？」

「おお、そうだった！」

どうやら忘れていたらしい。

「実は、そなたの世界は『仮面ライダー』の世界と繋がってしまつての……。このまま放っておいてもライダーはいるが、近い将来には壊滅する。だからそなたにも協力して欲しい！」

「……どうやって？」

「そなたに『すべてを超える者』の力を授ける。そしてそのライダーに変身し、世界を守るのだ」

「……わかったわ、やってみる」

「おお、それは真か！」

「聖夜だつて向こうの世界でこれからがんばるのにあたしだけグータラしてるわけにはいかないじゃない！ それにこのチャンスを見失ったら、もう生きれなくなる、そうでしょ？」

「やはり、頭がいいな」

「ま、そんなこんなで、よろしくお願いします！」

こうして愛音はライダーの力を手に入れた。

愛音の体は光に包まれ、空間から消えていった。

「……頼んだぞ、神の力を持つ姉弟よ」

序章 2（後書き）

次から変身です。

第一話 デイオーバー（前書き）

いよいよ戦いです。

第一話 デイオーバー

愛音が目を覚ますと、そこは自分の家のベッドの上だった。

「……夢？ まあ、そりゃそうだね、うん」

愛音は起き上がり、部屋を出てから聖夜の部屋に入った。

「聖夜、起きてる？」

しかしそこには聖夜の姿はなかった。

リビングルームにも洗面所にもいない。愛する弟はすでにこの世界にはいないのだ。

愛音も頭の中ではわかっていたし、実際にそれを理解しようとした。

しかしそれを拒否しようと頭が動く。

家の中をすみからすみまで見て、ようやく落ち着いたのか台所へ向かった。

そして台所へ行く途中、視界の隅に紫色の物体が入った。

リビングのテーブルに置いてあったそれは一見デジタル時計みたいだ。実際に時間が表示されている。

そしてそのすぐ横にはカードケースのようなものが……。

「これって、『ライドブッカード』？　ていうか本物？　……のわけないよね。じゃあこの時計は？」

自問自答するが、答えは出ない。

「ま、いいか。朝ごはん作ろ〜っと」

愛音は朝食を作り始めた。

「……そういえば、聖夜、いないんだっけ……。二人分…作っちゃった……」

いつもの調子で二人分作ってしまった愛音は涙声でそう呟いた。

「……そう…聖夜はいない。……え、じゃあもしかしてアレは……！」

愛音は作り終えた朝食を急ぎ足でテーブルまで持っていき、ライドブッカードと時計を見た。

ライドブッカードの中にはそれぞれのライダーのシルエットが描かれたカードと、愛音も知らないライダーのカードが入っていた。そしてさらに見知らぬライダーの『フォームライド』カードとそれぞれの『アタックライド』カード、そして『ファイナルアタックライド』カードがあった。

「……『デイオーバー』。オーバーは『超える』と言う意味ね。『すべてを超える者の力』ということは、あたしはこのライダーに変

身するってことね」

『カメンライド』カードの中で唯一ライダーの絵が描かれているカードを見て言った。

「おそらく変身するときはこの時計を使うのね。カード一枚入るぐらいの隙間あるからキンググラウザーみたく自動ローラー式ね」

少し見ただけでここまで推測ができるのはやはりそれ相応の知識があつてのことだろう。

「今日は……日曜。ってことはあたしが死んでから1日しか日が進んでないのね、というか普通に寝てたって感じね」

愛音は朝食を食べ始めた。

（ちょっと外に出て周ろう。何か変わったことがあるかもしれない）

その後、朝食を食べ終えた愛音は時計とライドブッカードをもって外に出た。

「時計じゃつまらないから『ディオーバードライバー』に命名」

勝手に名前をつけた……。

最近買ったばかりのバイクに乗った愛音は街を走り回る。

今のところ異常はない。

「うーん、やっぱり怪人ってそうそこらへんにゴロゴロいるもんじゃないのかな？」

ゴロゴロいたら怖い。

そのとき

「キャアアアア！！！」

どこからか悲鳴が聞こえた。

「悲鳴！ それも近い！！」

愛音はバイクで悲鳴のした方まで走っていった。

たどり着いた先には、うずくまる女性と半透明な人間。

（まさかこれって、ファンガイアの仕業？）

愛音はそう考えると女性に駆け寄った。

「あの、大丈夫ですか！？」

「太郎が、太郎が！！」

太郎っていかにも安直な名前だと思ったやつ、許す。だってあきらかなエキストラだもん。

「落ち着いてください！ 犯人が誰か分かりますか！？」

「！」

すると女性はとてもおびえた表情を見せた。

「あ……あ……！」

「どうしました？」

「う……後ろ……！」

「え！？」

愛音が振り向くと、そこにはハサミムシをベースとしたイヤーウィッグファンガイアがいた。

「こいつが犯人か！ 避難しててください、ここはあたしがなんとかします！！」

「は、はい！！」

女性は逃げた。

「さて、じゃあ初めての变身、行きますか！」

愛音はディオーバードライバーを右腕に重ねた。

するとドライバーからベルトが出て、右腕にしっかりと固定された。

そして腰にもベルトが。

愛音は腰のベルトにライドブッカーを取り付け、そこから1枚のカード……『デイオーバー』のカードを取り出し、ドライバーに入れた。

『カメンライド……』

「じゃ、行くわよ」

ドライバー上についているスイッチを押した。

『デイ・オーバー!』

愛音の体は複数のシルエットで包まれ、黒いスーツを身にまとった状態になった。

そしてその直後、スーツに様々な紫色のパーツが浮き出て、ドライバーから出た紫色のプレートが*の溝をつくるように頭に刺さった。

そして最後に目が緑色に光った。

これが『仮面ライダーデイオーバー』だ。

「さあ、覚悟はいいかしら?」

デイオーバーは攻撃の構えをとった。

「ウググググ……!」

「うおりやつ!!」

デイオーバーは連続でイヤーウィッグファンガイアを殴った。

愛音本人には戦いの知識というものはあまりない。ただ、力は意外とある。

「今度は蹴りよ!」

次は蹴りで攻撃をし、最後に吹っ飛ばした。

「ウガアツ!!」

「じゃ、そろそろ変えてみますか」

デイオーバーはライドブッカーから赤いデイオーバーが描かれたカードを取り出し、ドライバーに入れた。

『フォームライド デイオーバー・マーズ!』

デイオーバーの紫の部分が赤に一変した。

「へえ、なんか燃え盛る炎の如く力が沸いてくるみたい」

デイオーバー・^{マーズ}Mは試しに一発イヤーウィッグファンガイアを殴った。

「グギャルルツ!!」

イヤーウィッグファンガイアは先ほどよりも遠く吹っ飛んだ。

「まあ、そろそろ遊ぶのはやめにしてと……」

デイオーバー・Mはライドブッカーからカードを一枚取り出した。

それと同時にイヤーウィッグファンガイアが両腕のシザーハンズでデイオーバー・Mに斬りかかった。

「！ 危ないなあ……」

軽く避け、先ほど取り出したカードをドライバーに入れた。

『ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ・デイオーバー！』

デイオーバー・Mは元の姿、デイオーバー・通常体に戻りその目の前に何枚ものデジタル化されたカードがズラリと並んだ。

「はっ！」

デイオーバーは右拳をかため、カードに突っ込んでいった。

デイオーバーはカード間を瞬間移動するかのように移動し、イヤーウィッグファンガイアの目の前まで来るとエネルギーが溜められた右拳で思いっきり殴る、「デイメンジョンナックル」を発動した。

「うおおおおおおお！！！！」

「グロアアアアア！！」

イヤーウィッグファンガイアは殴られてすぐにステンドグラスのよ

うに砕け散った。

「ふう〜、疲れたあ……」

デイオーバーは変身を解き、バイクに乗った。

すると愛音はバイクの見た目が変わっているのに気づいた。

「なんか、かつこよくなってるんですけど！ これは『オーバードライブ』に命名！」

愛音がそう叫ぶと、ライドブッカーから2枚のカードが飛び出した。

1枚にはオーバードライブが、もう1枚にはオーバードライブと同じカラーリングのロボットが描かれていた。

「……へ〜、これってオートバジンっぽくすることができるんだ？」

愛音はそう呟き、オーバードライブにまたがって走っていった。

「……」「デイオーバーが誕生してしまった……」

一人の男が、愛音が去ってゆくのを見て言った。

「……」「やつを消さねば……！」

第一話 デイオーバー（後書き）

なにか感じたことがあれば、言ってください。

第二話 高校とオートマテック（前書き）

いきなり急展開（？）です。

第二話 高校とオートマティック

愛音が変身し、見事イヤーウィッグファンガイアを撃破した翌日。

愛音は朝食を食べ終わるとオーバードライブに乗って高校へと向かった。

彼女が通うのは「旗琴^{はたご}高等学校」。普通科で共学だ。

その日の授業は難なく進んでいき、今昼食時。

(……今のとこ異常なし。いつ敵が来てもいいように準備しておかなきゃ)

自分で作った弁当を食べながら、愛音はそんなことを考えていた。

「あ、いたいた先輩！ お弁当一緒に食べましょう！」

「あ、美輝^{ミキ}！ いいよ！」

わざわざ2年生の教室にまで来て愛音を呼んだのは、1年生で愛音の後輩の美輝。

愛音になぜか懐いており、よく一緒に行動する仲である。

愛音は教室を出て、美輝とともに外のベンチで弁当を食べた。

「そつえば先輩、最近変な生物が人間を襲っているって知ってますか？」

「え、生物……ああ、もしかしてあれね」

「そう、あれです。しかもその生物があまりにも仮面ライダーの怪人に似すぎているんですよ。……先輩、たしか仮面ライダー見てますよね？」

「ええ、美輝もでしょ？」

「はい！ ……それで私、この前ワームみたいなのに出くわしたんです」

「ワーム？ どんな？」

「それが、先輩に擬態していて……なんか性質が本物っぽいんですよ」

「そういえばあたしも、聖夜に擬態したのを見た気が」

その時愛音は自分がデイオーバーになるきっかけとなったあの時を思い出していた。

「……どうかしましたか、先輩？」

「え、ああ。なんでもない」

愛音はあわててその記憶をしまった。

「……そういえば、弟さんはどうしたんですか？」

「え？」

「いえ、いつも弟さんのことを話すので……実は弟さんの話を聞くのも楽しみなんです」

「……そう」

その時愛音は聖夜がいないことをどう言おうか悩んでいた。

「……聖夜は、昨日親戚の家に行ったわ。そしてそこで暮らす」

実際、聖夜の通う中学校には「急に親戚の家に貰われることになった」と言っただ。

もしかしたらまた帰ってくるのかもしれないのに、不用意に死んだとは言えない。

「す、すみません。不謹慎なことを聞いてしまっただ！」

「ううん、いいの。聖夜にはちゃんと生きて欲しいから。あたしなんかと居ても、多分辛い思いばかりをさせてしまっただろうし」

「……………」

「それでも、あたしが聖夜のことを愛してるということには変わらない。それにまた長期休日になれば戻ってこれるし」

「……そうですか」

その時、校舎の予鈴が鳴った。

「あ、予鈴だ。じゃあまたあとでね」

「はい。それでは」

二人は別れ、それぞれの教室へと戻っていった。

愛音の次の授業は英語。教師は瀬戸瀬^{せとせ}という名でメガネをかけたコワモテっぽい顔だがとても優しい人だ。

しかし今日のこの人はなぜか教室に入るととても険しい顔をしていった。

(……先生、どうしたんだろ?)

「……………」

しかし瀬戸瀬は無言でいた。まるでそこに我がないように。

「……………」

「あの……先生、授業を……」

委員長がそう言っても、まるで聞こえていないかのように無言を貫き通す。

(……なんかおかしい)

愛音だけでなくクラスのほとんどがそう思っていたことだろう。

その時、クラスの扉がガラガラと開いた。

「すまん、遅れた！ いつの間にか気を失っていた！！」

あわてて教室に飛び込んだのは瀬戸瀬だった。

「……え！？」

「えって……は！？」

入ってきた瀬戸瀬はすでに教室内にいた自分の姿を見て驚いた。

「お、俺！？」

「先生が二人……！！」

「……………」

一方、先に入ってきたほうの瀬戸瀬は相変わらず無言。

「おい、俺！ 一体どうやって俺になった！！」

（先生、言ってる意味がよくわかりません）

愛音は心の中で突っ込んだ。それと同時に先の瀬戸瀬の姿が一変し、サナギのような形をした物に変わった。

「な、な、な！！」

「あれは、ワーム！」

サナギ態だからこそクロックアップはできないが、ワームサナギ態は瀬戸瀬を殺しにかかった。

「グキュルルルル」

「く、来るな！」

（あのままじゃまずい！ でもこの状況では変身できない！）

他の生徒はキヤーキヤーと騒いでいる。あるものはパニクリ、あるものは身を隠し、またあるものは気絶している。

瀬戸内は教室の外に出ようとした。しかし、外には人がいた。

「……………」

「だ、誰だ貴様は！！ いや誰でもいい、助けてくれ！！」

「………… 助けてあげますよ。あなたを生きる苦しみから」

そのとき、愛音はカードを取り出し、ディオーバードライバーに入れた。

『コールライド…………』

（お願い、来て！）

愛音はスイッチを押した。

『オーバードライブ!』

ブロロロロロ!という音とともに、一台のバイクが教室の窓を突き破って突入してきた。

「キャアアアアア!!!」

その真下にいたものはガラスをかぶりそうになったが、ぎりぎりあたらなかった。

オーバードライブは敵を確認したのか、ワームサナギ態に体当たりをした。

「! グギュルル」

ワームサナギ態は黒板のほうへ吹っ飛んだが、すぐに立ち上がった。

(だったらこれよ!)

愛音はカードをもう一枚入れ、スイッチを押した。

『フォームライド オーバードライブ・オートモード!』

オーバードライブは変形し、一機のロボットとなった。

(か、かつこいいい~~~~~!)

感動する愛音をよそに、オーバードライブはワームサナギ態をハン

ドルから作られた剣で攻撃していき、最終的に爆破させた。

一方、瀬戸瀬の目の前にいる謎の男は逃げようとする瀬戸瀬の腹を殴り、教室の奥へと吹っ飛ばした。

「グハッ！」

「あなたはこの世にいてはならない。そしてこの教室の中にいる生徒の一人も……」

男は机の下から顔を出して見ていた愛音をチラッと見た。

「……え、あたし？」

男はどこからか紫色の剣のような物を取り出した。

「ひっ！」

『スタンバイ』

さらにどこからともなく機械のサソリが現われ、男の手に乗った。

「俺はあなたたち二人を消す。……変身」

男はサソリを剣にはめた。

『ヘンシン』

電子音が鳴り、男は姿を変えた。

（あれは、仮面ライダーサソード！）

愛音はそう思うや否やオーバードライブを使い、サソードを攻撃させた。

「ぐっ……」

「今のうちにみんな逃げて！！」

突然怒鳴ったので驚いたのか、全員素直に教室をでて、どこかに行った。

これで邪魔者はいなくなった。

『カメンライド デイオーバー！』

愛音はデイオーバーに変身すると、サソードと向き合った。

「出ましたね、デイオーバー」

「悪いけど、先生を殺させるわけにはいかない！　だって理不尽にもほどがあるもん！」

おそらくそれだけの理由ではないのだろうが、デイオーバーは攻撃態勢にはいった。

『アタックライド スラッシュ！』

剣となったライドブッカーを持ったデイオーバーとサソードの戦いが始まった……。

第二話 高校とオートマティック（後書き）

藤「どうも、藤龍です」

愛「愛音です」

藤「今回からあとがきをこのように使わせていただきます」

愛「……ところで、どうしていきなりサソード!？」

藤「さあ？」

愛「それからどうして美輝の苗字がかかれてないの!？」

藤「さあ？」

愛「答えなさい!！」

藤「……さて、次回はディオバーvsサソードです。もしかしたら愛音の疑問のうち一つがわかるかも」

愛「ちよつとまって、まだあるわよ！　なんで先生が襲われるの!？」

藤「ではまた次回!」

愛「おい、ねえ、ちよつと!！」

第三話 経験の差（前書き）

ちよいとさ気味です。

第三話 経験の差

「はあっ！」

「ふっ！」

デイオーバーとサソード・Mマスクドの刃が斬り合い、火花が散る。

しかし、愛音にとってはこれが2度目の戦い。やはり実力の差があるためか押されきみだ。

（っ、強い！ とてもじゃないけどかなわない！ それにもしキャストオフされたら……！）

愛音は先ほどから防戦一方で、攻撃する暇がない。

相手が弱いということを知ったのか、サソード・Mはサソードヤイバーを振るスピードを速めた。

「っ……！」

「聞いていた以上に弱いですね。これなら、キャストオフする必要もない」

カキンッ！

サソード・Mはデイオーバーのライドブッカーを吹っ飛ばした後、デイオーバーの腹にひざで蹴りをいれた。

「ぐふっ！」

「……なぜ、あの男がこんな雑魚のことを恐れていたのかがわかりません」

あの男って誰、とデイオーバーは言おうとしたが、声を出そうとしても咳が出るばかりだ。

「終わらせてあげましょう、あなたの希望を」

サソード・Mはサソードヤイバーを振りかざし、デイオーバーに向かって振り下ろした。

（……まだ、やれる！）

ヤイバーがデイオーバーを切り裂こうとしたとき、紫色の剣がそれを妨げた。

「オーバードライブ！」

それはオーバードライブが持つ剣だった。

オーバードライブはその剣を強く振り、サソード・Mを怯ませた後デイオーバーにライドブッカードを渡した。

「ありがとう、取ってくれたのね！」

すると、ライドブッカードから1枚のカードが飛び出した。

（……これは、使えそうね）

デイオーバーはライドブッカードから別のカードを1枚取り出し、ド

ライバーに入れた。

「今度はあたしたちの攻撃よ!」

『フォームライド デイオーバー・アース!』

電子音が鳴ると、デイオーバーの紫の部分が黄色に一変した。

「次はこれ!」

『アームドライブ デイオーバー・アースドライブ!』

オーバードライブは変形し、いくつかのパーツに別れデイオーバー・^{アース}Eに装着された。

オーバードライブを装着したデイオーバー・Eは皆か戦艦を思わせるような見た目となった。

これがデイオーバー・E D。^{アースドライブ}

「うわっ、ちょっと重い!」

確かに、デイオーバー・E Dが一步步くたびに地響きがした。

「……わからないな。どうして動きにくくなってまで変身する」

「……さあ?」

『アタックライド ブラスト!』

するとデイオーバーの装備のあちこちから無数の弾が放たれた。

不意を突かれたサソード・Mはそれらを諸に喰らい、体勢を崩した。

「うおおおー！」

「……少しはやるみたいです。でもこれはどうでしょう？」

サソード・Mは手に持ったサソードヤイバーについているサソード
ゼクターの尻尾を倒し、ヤイバーに刺した。

『キャストオフ チェンジ・スコーピオン』

サソード・Mはキャストオフをし、サソード・Rライダーへと姿を変えた。

「やばっ、本気!？」

「本気でつぶさないとこちらがやられかねません。クロックアップ」

『クロックアップ』

サソード・Rがクロックアップをすると、愛音の目では追えないスピードで動き始めた。

装甲のせいであまり動けないデイオーバーをサソード・Rは次から次へと斬った。

「がっ、やっ、ひゃっ!！」

ついには装甲が解除され、オーバードライブはバイク形態に戻って

しまった。

「ぐっ……!!」

デイオーバー・Eにも相当のダメージが残り、装甲が解除されても立つことがやっただ。

『クロックオーバー』

「立てたとしても、あなたの死は決まっている」

サソード・Rはサソードゼクターの状態をマスクドフォームのときに戻した後、またライダーフォームの状態へと戻した。

「ライダー……スラッシュ」

『ライダースラッシュ』

サソード・Rはヤイバーを構えると、デイオーバー・Eを何度も斬りつけた。

「い……」

デイオーバー・Eの体からはこれでもかというくらい火花が散る。

そして最後の一撃が放たれた。

ズシャッ!

「イアアアアアアアアア!!!」

断絶魔のような叫びの後、ディオーバー・Eを中心に爆発が起きた。爆発の後、残っていたのは変身が解け、意識がだんだんと薄れていく愛音だけだった。

「……まだ息があるか」

サソード・Rはヤイバーを愛音の首の真上で構え、そこから振り下ろした。

（……これで…終わる…の…？）

『クロックアップ』

絶望した愛音の目に、ものすごいスピードで進んでいく赤い物体が入った。

それはサソード・Rにぶつかると、思い切り吹っ飛ばした。

（……あれ…は…力…）

愛音の意識はそこで途切れた。

第三話 経験の差（後書き）

藤「負けちゃいましたね」

愛「……そりゃそうよ、だってまだレベル1、よくて2だもん」

藤「無茶すぎです」

愛「うるさい！ それより、ちょっと説明してくれない？」

藤「なにを？」

愛「あたしがオーバードライブを装着したとき、どうなるかを。今回は動きが鈍くなつて射程範囲が広がっただけっぽかったけど」

藤「じゃ、説明しましょうか。」

オーバードライブの装着はそのときのデイオーバーのフォームによつて変わります。例えばアースフォームの場合は守備が高いので鉄壁型、そして間接攻撃の射程範囲が広がります。でもその代わりにスピードが大幅に下がるという見返りがありますので、今回使うべきではなかったということです」

愛「じゃあ、他のフォームでは？」

藤「それはそのときのお楽しみ。ではチャオっす」

愛「だから適当にするな！」

第四話 先輩と後輩（前書き）

妹のノーパソからこっそりです。

第四話 先輩と後輩

(……なんか、額が冷たい……ん?)

愛音が目を開けると、そこは自分の部屋のベッドの上だった。

額には濡れたタオル、全身にはシップと包帯が巻かれている。

「あ、目が覚めましたか？」

そう言ったのは美輝だった。美輝は手元のバケツに入っている冷水にタオルを何枚も入れていた。

「ええ。……もしかして、美輝があたしをここまで運んでくれたの？」

「それだけじゃありません！ 怪我の治療や着替え、バイクを運ぶのだってやりました！」

「あ、ありがとう……て着替え!？」

愛音は絶句した。

「まさかあんた、あたしの裸見たわけじゃ「そりゃ見なきゃどうやって着替えさせろっていうんですか？」うう……」

「女だからいいじゃないですか？ 別に襲ったわけではありませんし」

だんだん危ない話になっている、そう思った愛音は話を変えようとした。

「あ、あのさ、あの後学校はどうなったの？」

「どうなったものにも、私が先輩の教室に行ったときにはボロボロの先輩がいただけですから。でも、他に負傷者はいないみたいです」

「そう……よかった」

愛音はホッと胸を撫で下ろした。

そのとき、ピーッと台所からタイマーが鳴った。

「あ、ちよつと失礼します」

美輝は部屋を出て、台所へ向かった。

一人残された愛音はすこし現状の確認をした。

そして、一つの結論に達した。今のままでは誰も守れないと。

今回はたまたま自分以外の人間は無傷だったが、今度もそうとは限らない。

少なくとも、サソードには勝てるレベルにならないといけない。

そしてそのためには、カードを集める必要があると。

「おまたせしました」

しばらくして、美輝がお粥の入った碗をもって部屋に戻ってきた。

「はい、先輩。あ〜ん」

美輝は粥の乗ったスプーンを愛音の口に近づけた。

「い、いいわよそんな」

愛音はためらうが、美輝はお構いなしに口に突っ込んだ。

「むぐっ」

「仕方ありませんよ、先輩は怪我をしてるんです。それにご両親も居ないんですよ？ 誰かが面倒を見ないといけないじゃないですか」

美輝の言っている事は正論だ。

「……ねえ、美輝。あなた今まで、この世界で主役ライダーを見た事ある？」

愛音は聞いて見た。もしも勝利への近道となるのなら、聞くのが一番いいのだろうと思ったからだ。

「……主役はありませんけど、そうですね。G3なら何度も見かけましたよ」

美輝の話によると、G3は怪人がらみの事件になると毎度毎度派遣されるらしい。現に学校にサソードが出現したときもいたようだ。

「そう……」

愛音は少し期待はずれのような表情をした。

そんなとき、美輝はふと時計を見た。

「あ、ごめんなさい。そろそろ家に戻らないと」

「あ、そう？　ごめんね、面倒かけちゃって」

「いいんですよ、先輩のためならなんだってします！　あ、お粥ここに置いてきますので食べてください！」

美輝はその後、「おじゃましました」と言ってから愛音の家を出た。

~~~~~

美輝は自宅へ向かって歩いていった。

「……なぜ、ディオーバーを始末しなかった。絶好のチャンスだったろう？」

そんな彼女に、そばにある電柱の影から一人の男性が話しかけた。

「まさかディオーバーだということに気づかなかったわけでもあるまい」

「……………」

美輝は少し考えてから、また歩き出した。

「私には、先輩がこの世界の破壊者には思えません。だから私には先輩を殺す理由がない、ただそれだけです」

美輝は早々にその場を立ち去ろうとした。しかし、男の一言によってその足は止められた。

「……やつを殺せないのなら、兄は死ぬぞ」

「……」

「選べ。兄か、デイオーバーか」

「……明日……結論を出します」

美輝は唇を噛み締め、走っていった。

（選べるはずがない、どっちも私にとっては大切！！）

美輝は心の中で叫んだ。

~~~~~

愛音は美輝の作った粥を食べながら、レンタルショップで借りていた「仮面ライダーカブト」を見ていた。

理由はサソードの研究だ。

しかし、あのサソードが神代剣でない可能性も考えると、ビデオだけでは物足りない。

そう思った愛音はパソコンを起動させた。

第四話 先輩と後輩（後書き）

藤「ちょっと短めでした」

愛「ねえ、本当に美輝って何者？」

藤「ノーコメントで」

愛「（またかよ）それから謎の男ってのは？」

藤「それもノーコメで」

愛「（こいつ！）じゃあ、次回は？」

藤「さあ？ まだ未定です」

愛「（ブチンッ！！）このコーナー意味ねえじゃねえか！！ 次回からは次回予告コーナーにしゃがれ！！」↑ドツガハンマーで叩きまくる

藤「ギヤアアアアア！！」

第五話 風の力

翌日の朝。

目が覚めた愛音は大きく伸びをしてから自分の体が大丈夫かどうか確認した。

「……よし、大丈夫。一部痛むけどそれ以外は痛まない」

彼女は驚異的な回復力の持ち主で、医者に「全治三週間」と言われた怪我をたった5日で治した。

それに比べれば今回の怪我はどうってことないらしい。

愛音は部屋を出ると台所に向かった。

朝食を作る予定だったが、昨日美輝が作り置きしていった粥があるため、それで朝を済ませた。

「……ごちそうさま」

粥を食べ終え、身なりを整えると、愛音は同じく美輝が移動させておいたオーバードラライブにまたがり、高校へ向かってエンジンをかけた。

~~~~~

「……臨時休校？」

校門に着いた愛音は門に張られた張り紙を読んだ。

「……先日、本校に怪物が大量に出没したため、誠にご勝手ながら1週間の間臨時休校とします。本校に御用のある方は次の番号までご連絡を。0123-753-315……本当に勝手ね」

とにかく、やる事が無くなった愛音は駅前のデパートに行くことにした。

~~~~~

時を同じくして、美輝は駅前デパートの地下食品売り場で食材を買っていた。

「あとは……豆腐と卵、それから醤油ね」

豆腐をカゴに入れ、卵のエリアに行こうとしたとき、昨日の男が目の前に現れた。

「！ どうしてここにまで」

「……いいのか、そんなにのんびりしていて」

「そんなのはこっちの勝手。今日結論を出すって言ったから、その結論を出すときに出てくればいいじゃない！」

男の質問に美輝は怒鳴り返した。

「だが、そうはいかないのが現実だ」

「……どういうこと？」

「デイオーバーが間もなくここに来る」

「！」

美輝は息を呑んだ。

「やつを始末するのが結論なら、すぐに行け」

男はそう言い残し、消えた。

美輝はただそこに立ち尽くすだけだった。

（……先輩が、来る）

（私は、先輩を殺すしか、ないのでしょいか）

「キヤアアアアア！！！」

その時、1階の方から悲鳴がした。

それを聞いた美輝はカゴをその場に置いて、エレベーターを走って上っていった。

~~~~~

デパートについた愛音はいち早くその異変に気づいた。

1階には、この時間帯は大勢いるはずの客がいなく、そこには大量のオルフェノクやワーム、ファンガイアなど人間になることのできる怪人が代わりに大勢いたのだ。

「店員とかはそのままだから、客が全員ね！」

愛音はデイオーバードライバーを取り出すと、それを右腕に装着した。

そしてカードをそれに入れ、スイッチを押した。

「変身！」

『カメンライド デイ・オーバー！』

デイオーバーに変身した愛音は店員を避難させると、敵を見た。

「……ざつと20くらいね」

『フォームライド デイオーバー・ジュピター！』

デイオーバーの紫の部分が緑に一変した。

「身が軽くなった……スピードね！」

デイオーバー・」はそのスピードを活かし、敵に攻撃をしていった。  
そして、ほぼ半数が爆破した。

「……ただの物理攻撃でやられるって、ちょっと弱すぎない!？」

『アタックライド ブラスト!』

デイオーバー・」はライドブッカーを手に持ち、銃のように使った。  
すると、目に見えない速さで紫色の弾が大量に放たれた。

「は、速すぎ!」

その一撃で残党も撃破。1階の敵はすべていなくなった。

「……なんか、呆気なさすぎる。これって誰かの作戦だったりする?」

「突撃——————!!」

「へ?」

その時入り口から武装をした人間が大勢入り込んできた。

彼らの持っている盾には対怪人特殊部隊(MFS)の紋様。

おそらく騒ぎを聞きつけて派遣されたのだろう。

しかしそこにいたのは怪人ではなく一人の仮面ライダー。

「……あれ、怪物は？」

「知らん。それともあのライダーの巻き起こしたことか？」

『そこにいる仮面ライダー、変身を今すぐに解きなさい！』

デيوオーバー・Jはあわてて反対の方向を見た。

(……やばいなあ。このままじゃあたしが犯人になっちゃうし……)

何かいい策は無いかと考えていると、ふと彼女の視界の隅に見覚えのある人影が入った。

……仮面ライダーサソードの変身者だ。

(……やっぱりあいつのせいなのかしら)

『コールライド オーバードライブ！』

「うわあああああ!!」

デيوオーバー・Jが呼んだオーバードライブは、入り口から突進してきた。そのため、MFSの人たちを跳ね飛ばした。

「……ごめん！」

デيوオーバー・Jはそれだけ言うと、カードを入れた。

『アームドライド デيوオーバー・ジュピタードライブ！』

オーバードライブはいくつかのパーツに別れると、デイオーバー・Jに装着され、デイオーバー・Jは飛行機をイメージさせるような姿となった。

これが、デイオーバー・JDジュビタードライブ

（予想通りね、飛べそう！）

デイオーバー・JDはサソードの変身者のいる方へ飛んでいった。  
そのスピードはツバメと匹敵する。

「……………」

サソードの変身者はそれを見ると、何も言わずに割れた2階の窓から飛び降りた。

「！ 待ちなさい！」

デイオーバー・JDもそれを追いかけて、窓を潜り抜け外へ出た。

「……………」

「総隊長、大丈夫でしたか？」

『ああ、大丈夫だ。それよりお前らは？』

「全員なんとか無事です」

『そうか』

「それよりそのメガホンをどかしてください」

『ん？ ああ、すまない』

総隊長と呼ばれた男はメガホンをどけた。

「いったいなんだったのでしょうか、さっきのライダーは」

「……分らん。だが、俺たちを跳ね飛ばし、そのまま逃げたということは、敵であると考えてもいいだろう」

男はそれから顎をつまんで何かを考え始めた。

(……あの声、女か、それとも子供か)

「それよりもどうします、総隊長。もう目標がないんですよ」

「ん、そうだな。……まもり守！」

男が呼ぶと、入り口に待機していたトラックから一人の男性が降りてきた。

「どうしました？」

「ゼクトルーパーを動かせ。未知のライダーが現れた」

「未知の……ですか」

「色は黒に緑のライン。頭がちょっとバーコードぽかった」

「了解。……ゼクトルーパー隊、直ちに黒に緑のラインのライダーを搜索しろ！ 発見したものはすぐに総隊長に連絡！」

「はっ！！」

「それから守、いざとなつたらG3システムを使え。そのために前はトラックの中で待機だ」

「分かりました！」

ゼクトルーパーたちはすぐに移動をはじめ、守はトラックに戻っていった。

だが、その光景を見ていた部外者が一人いたことに、誰も気づかなかった。

## 第五話 風の力（後書き）

### 次回予告

愛「あなたに負けたときの屈辱、今晴らさせてもらおう！」

サ「俺の名は……」

美「先輩、やめてください！」

藤「郡司侑輝さんに習ってやってみましたが……」

愛「正直言っていい？」

藤「はい」

愛「ネタバレじゃん！」

藤「でも予告つてもともとそのためにあるようなもんだよ？」

愛「アホッ！」

藤「じゃあ次回からはカードの説明でもしますか」

## 第六話 形勢逆転

逃げたサソードの変身者を追ったディオバー・JDは、ジュビタードライブ近くにあった廃ビルの屋上にたどりついた。

敵は、目の前だ。

「やっと、見つけたわよ」

「……まだ1日しか経ってませんがね」

男はサソードヤイバーを取り出した。

『スタンバイ』

サソードゼクターがどこからともなく現われ、男の手に乗った。

そして男はゼクターをヤイバーに装着した。

「変身」

『ヘンシン』

男はサソード・Mマスクドとなった。

「……キャストオフ」

『キャストオフ チェンジ・スコピオン』

さらにキャストオフをし、サソード・Rライダーとなった。

「一気に終わらせて上げますよ……クロックアップ」

『クロックアップ』

サソード・Rはクロックアップを発動した。

しかし、今のデイオーバーはジュピタードライブ。スピードに特化しているため、クロックアップにギリギリ追いつける。

「残念だけど、こっちも同じくらいね！」

「なっ！」

デイオーバー・JDはカードを1枚ドライバーに入れた。

『アタックライド スラッシュ！』

すると、デイオーバー・JDの背についていた翼から一本の剣が飛び出て、デイオーバー・JDの右手に渡った。

「うおりゃっ！！」

デイオーバー・JDの剣を振るスピードはかなりのもので、サソード・Rを斬りつけると遠くまで吹っ飛ばした。

「くっ……！」

『クロックオーバー』

それと同時にクロックオーバーとなり、デイオーバー・JDの一方的な攻撃を受けるのみとなった。

「オラオラオラオラ!!」

デイオーバー・JDはその剣でサソード・Rの鎧を斬りまくった。

「じゃ、この辺で……」

デイオーバー・JDはカードを1枚、入れた。

「あなたに負けたときの屈辱、今晴らさせてもらう!」

『ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ・デイオーバー!』

すると、デイオーバー・JDの目の前に1枚の半透明なカードが出現した。

デイオーバー・JDはそれに突っ込むと、消えた。

そしてサソード・Rの右隣に突如出現したカードからデイオーバー・JDが出てきて、サソード・Rを斬ると、またその先のカードに消えた。

そして次はサソード・Rの背後から。

これをさまざまな方向から繰り返していき、最終的に上空から出現した。

「うおりゃああああー!!」

死んだ、とその時サソード・Rは思った。

そしてせめて、自分の名を言ってから死のうという馬鹿な考えが浮かんだ。

「俺の名は……天道、総司そうじ」

「！先輩、やめてください！」

突如美輝の声が聞こえ、デイオーバー・JDのFFRは中断された。すると、廃ビルの階段のところから美輝がサソード・Rのもとへと駆け寄った。

「美輝!! あなたどうして!？」

「お願いです、先輩。もう、やめてください！」

天道総司は、私の、兄です!!」

「!!」

デイオーバー・JDは驚きを隠せなかった。よくあの状況で言った言葉が聞き取れたなとも思っていた。

「……てことは、あなたの苗字は……天道」

「……すみません、今まで黙っていて」

「いいえ、いいのよそれは。にしても、天道総司がまさかサソードだなんて……」

考え込んだディオオーバー・JDをよそに、サソード・Rは立ち上がり、美輝に下がるように言った。

「すまん、美輝。俺は、ディオオーバーを倒さねばならない」

「ど、どうして!?! どうして先輩と戦わなきゃならないの!?!」

「すまん!?!」

「……だったら、戦闘再開と行く?」

「ああ」

サソード・Rとディオオーバー・JDは戦闘モードに入った。

しかし

「もうやめてよ!?!?!?!」

美輝のするどい一括で、互いに動けなかった。

「美輝……」

「もういい、もういいよ!?!」

「しかしだな、美輝……」

「お兄ちゃんはどうしても先輩を倒さなきゃならないの!？」

「……ああ」

「……そう……なんだ」

美輝はハラリと涙を一粒落とした。

そして次の瞬間、持っていたカバンからある物を取り出した。

……ライダーベルトだ。

「だったら、お兄ちゃんの代わりに、私が、先輩と……戦う!」

「!」

「み、美輝!？ どうして!？」

美輝はベルトを腰に巻いた。

「私は、ある男の人から『デイオーバーを殺さねば、兄が死ぬ』と言われ続けていました。最初は、その意味が分からなかった。でも、今は分かる。……カプトゼクター!」

美輝が叫ぶと、どこからともなくカプトゼクターが現われ、彼女の右手に収まった。

「ごめんなさい、先輩。……変身」

『ヘンシン』

美輝はカブトゼクターをベルトに装着すると、仮面ライダーカブト・  
マスクド Mに姿を変えた。

## 第六話 形勢逆転（後書き）

### 次回予告

美「ごめんなさい先輩、ごめんなさい！……！」

『ワン、ツー、スリー……』

愛「み、美輝……」

？「騙されんじゃねえ……！」

愛「美輝が、カブト……」

藤「まあ、推測がつく人にはついたかもしれないが」

愛「でもどうして天道総司はあのタイミングで名乗ったの？ 馬鹿なの……？」

総「馬鹿っていうな」

愛「ていうかどうしてあんたがカブトじゃなくてサソードなの……？」

藤「それについてはまた次回……」

## 第七話 結論（前書き）

さて、ディオーダーVSカブト、始まりです！

## 第七話 結論

仮面ライダーカブト・M<sup>マスクド</sup>に変身した美輝はカブトクナイガンを持つと、デيوオーバー・JD<sup>ジュビタードライブ</sup>に斬りかかった。

「はあっ！」

「くっ！ 待って美輝！ どうして戦わなきゃならないの！？」

デيوオーバーJDは剣で攻撃を防ぎつつも、反撃できずにいた。

ずっと仲良くしてきた友達と戦うことなど、彼女にはできないのだ。

「私は先輩と戦うことを選びました！ だから戦うんです、倒すんです！」

カブト・Mはカブトゼクターのゼクトホーンを倒した。

「キャストオフ！」

『キャストオフ チェンジ・ビートル』

「ぐっ……」

カブト・Mの装甲がすべて弾き飛ばされ、その一部がデيوオーバー・JDに当たった。

そしてカブト・R<sup>ライダー</sup>となった。

「……おばあちゃんが言っていました。それが自分で選んだ道ならそのまま進め、と」

『クロックアップ』

カブト・Rはクロックアップをした。

「は、速い！」

そのスピードはディオオーバー・JDにも追いつけぬほど速く、カブト・Rはディオオーバー・JDを何度も斬りつけた。

「くつ、あつ、はつ、キャッ！」

ディオオーバー・JDの装甲が外れディオオーバー・Jジュビターとなり、さらにオーバードライブは元のバイク形態に戻ってしまった。

「ごめんなさい」

『1』

「先輩……」

『2』

「……ごめんなさい！！」

『3』

カブト・Rはカブトゼクターのゼクトホーンを一旦マスクドフォー

ムの状態に戻した後、またライダーフォームの状態へと戻した。

ちなみにまだクロックアップは続いている。

ドライブの装甲も解除されているデイオーバー・Jには避ける術がない。

「ライダー……キック」

『ライダーキック』

溜められたエネルギーがカブト・Rの右足にすべて送られると、カブト・Rは蹴りの体勢に入った。

「み、美輝……」

『クロックアップ』

少し高めの電子音が鳴り、デイオーバー・Jは何者かによってカブト・Rから離れたところへ運ばれた。

それは青い鎧と赤い目で、クワガタムシをベースとしたライダーだった。

カブト・Rのライダーキックは何もない空間を蹴り、そのキックは床に叩きつけられた。

「ガ、ガタック!？」

変身が解けた愛音は自分を抱えていたライダーを見た。

「よっ！ すまねえな、妹がメーワク掛けちまってよ」

「え、え？ 妹って……え？」

ライダー  
ガタツク・Rは変身を解いた。

それはまさに、サソードの変身者である天道総司と同じ姿かたちだった。

「え……？」

「本物の天道総司は、俺だ」

「ええええええええええええ！？」

「お、お兄ちゃん!？」

カブト・Rも変身を解き、天道総司(?)に近づいた。

「おう、久しぶり」

「ほ、本物……？」

「本物だ」

「……証明できる？」

「……天の道を往き、総てを司る男。それが俺、天道総司！」

サソードの方が言わなかったセリフを言ったことにより、美輝が本人だと認めたのか、総司に抱きついた。

「お兄ちゃん!!」

「美輝、いままですまなかったな!」

「あの、感動の再開の途中ですみませんが……」

話しかけにくい状況で、愛音がおずおずと手を挙げた。

「あなたが美輝の本当の兄だというのなら、あそこにいるやつは何なんですか?」

愛音は反対側の方向に立っている天道総司を指差して言った。

「……あれは、俺に擬態したワームだ。その証拠を、見せてやる! ガタツクゼクター!」

総司が叫ぶと、どこからかガタツクゼクターが現れ、もう一人の総司に突進した。

「ぐあっ!」

その一撃はかなり重かったらしく、攻撃された天道総司は葡萄根アブラムシをモチーフとしたワーム、フィロキセラワームとなった。

「な? これでわかっただろ?」

「じゃ、じゃあ、どうしてお兄ちゃんに擬態してたの?」

「それは多分……前に倒し損ねたときじゃねえかな？」

総司はちよつといい加減な説明をした。

「……なぜ、俺の招待を暴く必要がある」

「ん、なんでだろうな。自分と同じ格好したやつが目の前にいたら誰でもやだろ？」

「わからんな。俺がいれば妹は悲しい思いをしなかったのかもしれないのだぞ？」

「それはな「そんなのは絶対にありえない！！ 美輝はあたしか兄かのどちらかを殺さなければならなかった！ そしてあんたが自分の名前を言っただけにあたしを殺すことを選んだ。……もし、本物の総司さんがいなかったらあたしは死んでいたし、あんた自身の正体もいずれ分かる。そしたら、美輝はとてつもない悲しみを背負って生きていくことになる！」

セリフを遮られた総司は不機嫌そうな顔をしつつも、愛音の言葉を聞いていた。

「あんたの勝手な行動ひとつで、不幸になる人が何人もいる！ あたしはそういうやつが、一番、許せない！！」

「貴様……何者だツ！！」

フィロキセラワームが怒鳴り返した。

愛音はカードを1枚取り出し、ドライバーに入れた。

『カメンライド……』

「あたしは……ただの女ライダーよ！ 変身！」

愛音はドライバー上のスイッチを押した。

『ディ・オーバー！』

「……人の幸せを奪おうとした罪、その身で償いなさい！！」

愛音はディオーバーへと変身した。

それと同時に、どこからともなくカブトゼクターが現れ、美輝の右手に収まった。

「カブトゼクター……もう一度、私と戦って！」

「行くぜ、美輝」

「ええ！ 変身！」

「変身！」

『ヘンシン』

『ヘンシン』

美輝と総司はそれぞれ、カブト・Mとガタック・Mに<sup>マスクド</sup>変身した。

その時、ディオーバーのライドブツカーから8枚のカードが飛び出て、ディオーバーの右手に収まった。

「（……まさか、こう来るとはね）行くよ美輝、総司さん！-」

「はい！」

「ああ！ ぶっ倒してやるぜ！」

ディオーバーとカブト・M、そしてガタック・Mはフィロキセラワームに向かって走り出した。

## 第七話 結論（後書き）

### 次回予告

ファイ「サソードゼクターよ、我の一部となれ！」

愛「行くよ、二人とも!!」

『ファイナルフォームライド』

美・総「ライダーダブルキック!!」

藤「うわぁ、お説教が微妙だった……」

愛「あんたの表現力じゃ限界だ」

藤「地味に追い討ちかけるなよ……」

愛「ま、過去を振り返ってはいけないわ！ 早く次話を書きなさい！」

藤「ふぁ、ふぁい」

## 第八話 初めてのファイナルフォームライド（前書き）

息抜きに書きました。

そしてかなり長いです。

## 第八話 初めてのファイナルフォームライド

フィロキセラワームと向き合っているディオーバーとカブト・M<sup>マスクド</sup>そしてガタック・M<sup>マスクド</sup>は、それぞれ攻撃を繰り返していった。

『アタックライド ブラスト!』

「はいはいはいはっ!」

「せやっ!」

「おりやっ!」

「グアアアッ!」

その攻撃はフィロキセラワームをゴリ押ししていった。

するとフィロキセラワームは目にも留まらぬスピードで動いた。

クロックアップだ。

「それだったらこつちも、ね!」

「ああ、行くぞ!」

「「キャストオフ!」!」

『キャストオフ チェンジ・ビートル』 『キャストオフ チェンジ・スタッグビートル』

二つの電子音がなり、カブト・Mとガタック・Mは装甲をすべて飛ばすと、互いにライダーフォームとなった。

「クロックアップ」

『クロックアップ』

そしてクロックアップでフィロキセラワームと同等のスピードを使い、攻撃していった。

「じゃあ、よろしく！」

デイオーバーは1枚カードを入れ、スイッチを押した。

『フォームライド オーバードライブ・オートモード！』

変形しロボットとなったオーバードライブはハンドルを抜くと、銃のように持った。

『ピピピピピピピピピピ』

狙いを定めているのか頭部のレンズから赤い光をまわしていると、ある一点で止まった。

『ピピピピピピピピピピ！』

オーバードライブはトリガーを引いた。

すると銃口から紫色のレーザーが飛び出し、すばやく動くモノにあ

たった。

「グアッ！」

フィロキセラワームだ。

クロックアップが解けたフィロキセラワームに向かってクロックアップの世界から集中攻撃が放たれる。

「グアアアアアアアアア！！！」

（……もはやリンチね）

そう思いながらもデイオーバーはブラストを放ち、オーバードライブも銃を撃つ。

『『クロックオーバー』』

「……解けたか。でも、まだまだやれる！！」

「お兄ちゃんに擬態した時点で、あなたのワーム生終わってるのよ！！」

「わ、ワーム生??」

クロックオーバーしても尚攻撃を繰り返すカブト・Rライダーとガタック・Rライダー。

しかもガタック・Rはガタックダブルカリバーを両手にかまえている。

このままやれば必殺技も意味ない……そうデイオーバーは考えていた。

しかしその直後のフィロキセラワームの行動により、その考えは打ち碎かれた。

「ま、まだだ、まだ終わらん！ サソードゼクターよ、我の一部となれ！」

『スタンバイ』

フィロキセラワームはどこからかサソードヤイバーを取り出し、サソードゼクターを呼び出した。

そしてそれを持つと、ヤイバーにはめるのではなく、自身の身体に吸収した。

「ウガアアアアアアアアアアッツ！！」

「な……！！」 「えっ！？」 「どういうつもりだ……！！？」

サソードゼクターを取り込んだフィロキセラワームの身体は異変を起こし、肉体の造りをだんだんと変えていって、ワームの王・スコルピオワームとなった。

「う、うそ」

「オオオオオオオオオオガアアアアアアアアア！！！！」

スコルピオワームはクロックアップをした。

「ク、クロックアップ！」

『クロックアップ』

エコーのかかった電子音と共にガタック・Rはクロックアップで対抗した。

しかし次の瞬間、ガタック・Rはその場に倒れた。

『クロックオーバー』

「く、くそつたれが……！」

「お兄ちゃん!？」

「総司さんがやられるってことは、やっぱりパワーが……!？」

「いや、スピードだ。やつのクロックアップはさっきのとは比べ物にならないほど速い!……」

「うsガッ!……」

「キャッ!……」

「うっ!……」

クロックアップを超えるスピードによる攻撃をディオーバー達は諸に受けた。

「しょ、しょうがない！！ 二人とも、なれないかもしれないけど  
頑張つて！！」

「「えっ！？」」

デイオーバーはライドブッカーから2枚のカードを取り出し、同時に  
ドライバーに入れ、スイッチを押した。

『ファイナルフォームライド カ・カ・カ・カブト！ ガ・ガ・ガ・  
ガタック！』

「人によつては気持ちいいかも」

デイオーバーはすぐに二人の背後に回り、背中を同時に強く押した。

「せ、先輩なんはうっ！」 「……ぬわっ！」

カブト・Rとガタック・Rはそれぞれゼクターカブトとゼクターガ  
タックへと変形をした。

『こ、これは……！？』

「その姿ならいけるかもと思つてね！」

『よ、よし、一か八かだ。行くぞ美輝！！』

『……………』

「……………美輝？」

『……今度、またやってください／＼／』

「あんたMだったのかよ!! さっさと行け!!」

ファイナルフォームミライド

FFRした二人はクロックアップした。

(……あとは、これを試してみるか)

デイオーバーはカードを1枚取り出した。

それと同時にクロックアップの世界から赤と青の物体が飛び出た。

『だ、ダメです先輩!』 『追いつけねえ!』

「そつ……じゃあ、これならどうかかな!？」

デイオーバーは手に持っていたカードをドライバーに入れ、スイッチを押した。

『ファイナルアームドライド カ・カ・カ・カブト!』

『ひゃわ!?!』

ゼクターカブトは更に変形し、デイオーバーに装着された。

デイオーバーは赤いカブトムシをモチーフとした鎧で身を包み、ベルトはゼクターのついていないベルトとなった。

これがデイオーバー・AK。  
アームドカブト

「……へえ、なんかすごい。あたしたち、一つになってるみたい」

(ひ、一つ……はっ／＼／)

「どうしてそんな反応!？」

『……俺は何すりゃいい?』

「あ……じゃあ、援護お願いします!」

『わかった!』

ゼクターガタックはクロックアップを再び使った。

「よし、行くよ美輝!」

(は、はい／＼／)

「……まだその反応!？」

『クロックアップ』

デイオーバー・AKもクロックアップを使った。

ゼクターガタックはスコルピオワームの一方的な攻撃を受けていた。  
元に戻る方法がわからない為か、かなりの苦戦状態だ。

「……これで終わらせる」

スコルピオワームは握りこぶしを固め、ゼクターガタックに殴りかかった。

ヤバイ、そうゼクターガタックは思った。

これを受ければ確実に終わる。しかし身体が思うように動かない。

「させないわよ!!」

すると、スコルピオワームと同等のスピードで動く赤い物体がスコルピオワームにとび蹴りを喰らわせた。

「大丈夫ですか!？」（お兄ちゃん!!）

『……同時に喋るなんて、器用だな』

ゼクターガタックは感心した。そこへスコルピオワームは殴りかかってきた。

狙いは、デイオーバー・AKだ。

「死ねええええええ!!!!」

「! しまった!!」

デイオーバー・AKは背後からの攻撃への反応が遅れてしまった。

しかし振り向かず左足で後ろに蹴った。

その蹴りはスコルピオワームの腹部を直撃し、はるか遠くまで吹っ飛ばした。

（先輩に攻撃……するな！）

「美輝！？ まさかあんたがやったの！？」

『……なあ、そろそろトドメ指さないか？』

ゼクターガタツクは言った。

「……そうね。総司さん、流れに身を任せてみて！」

するとディオバー・AKは2枚のカードをドライバーに入れ、スイッチを押した。

『ファイナルアタックライド カ・カ・カ・カブト！ ガ・ガ・ガ・ガタツク！』

2つの電子音が鳴り、ゼクターガタツクはスコルピオワームのところまで一気に移動すると、両アゴでそれをはさみ、空中に飛行した。

「は、離せ！ ……グアアアアアア！！！」

そしてそのまま地面に急降下した。その先には追撃の準備をしているディオバー・AK。

「……行くわよ、美輝！！！」

（はい！！）

『はあああああ！！！！』

ゼクターガタツクはスコルピオワームをはさんだままデイオーバー・AKに突っ込んでいった。

デイオーバー・AKは蹴りの体勢に入る。

「（必殺・先輩後輩絆キック！！）」

デイオーバー・AKが蹴る数瞬前にゼクターガタツクはスコルピオワームを離れた。

「ぐあああああああああああ！！！！」

スコルピオワームは「先輩後輩絆キック」をもろに喰らい、爆破した。

『クロックオーバー』

電子音が虚しく鳴り、デイオーバー・AKからはゼクターカブトが離れカブト・Rに戻り、ゼクターガタツクはガタツク・Rに戻った。

そしてデイオーバーの腰にセットされたライドブッカーから一枚のカード、「サソード」が飛び出し、デイオーバーの手に渡った。

「く……くそっ！ まだ終わっていない！！」

爆破したすぐそばではフィロキセラワームが倒れていた。そのすぐそばには壊れたサードゼクターが。

「いいえ、終わったのよ、あなたのワーム生は」

（だからワーム生ってなに！？）

カプト・Rの発言にデイオーバーが心の中で突っ込んだ。

「……お兄ちゃん、行くよ」

「本当にやるのか！？」

『1、2、3』

二人は同時にゼクトホーンを倒した。

『ライダーキック』

「ライダーダブルキック！！」

ドゴオオオオオオン！！

二人が同時にはなったライダーキックはフィロキセラワームの真上から振り下ろされ、フィロキセラワームは声無しに爆破した。

「本当にすみませんでした、先輩!!」

変身を解いた美輝は同じく変身を解いた愛音に頭を下げた。

「いいの、それは。それより、お兄ちゃんに会えてよかったじゃない」

「……先輩」

「本当に妹が迷惑かけたな」

「そんなご迷惑だなんて。むしろあたしのほうがお世話になったって言うか……」

美輝の家の前で話す三人。日はもう沈みかけている。

「そろそろ時間ね。美輝」

「はい、先輩。また学校で!!」

「うん、またね!!」

「……学校でも妹を頼むぞ」

「まかせてください! 美輝のことも弟と同じくらい愛してあげますから!!」

「愛……ハウッ／／／」

美輝は顔を赤くして倒れた。

「ちょ、美輝！？ 冗談なのに……」

「ハハハ。まあ、これからもよろしく頼む」

「はい。こちらこそよろしく願います」

愛音は愛用のオーバードライブにまたがり、片手を挙げながら家に向かって走っていった。

彼女たちの絆が強くなった瞬間だった。

「……あ、夕飯誘えばよかった」

オーバードライブを操縦しながら思う愛音だった。

「……ただいま、おばあちゃん」

美輝を抱えた総司は家に入ると真っ先に居間にいるおばあちゃんに挨拶した。

「お帰り。……何年ぶりだろうね」

「まだ１年だよ」

総司は微笑みながら答えた。そして美輝をソファに寝かせて言った。

「その１年の間に、こいつはとても成長したんだね」

「そうかねえ、まだまだ子供だよ」

「……確かに美輝はおばあちゃんの言うとおり、まだまだ子供だ。ただおばあちゃんの願いどおり、美しく輝いている」

「……………」

「おばあちゃんは『天の道を往き、知恵を授ける女』天道知恵<sup>ちえ</sup>。俺は『天の道を往き、総てをつかさどる男』天道総司。そして美輝は『天の道を往き、美しく輝く女』」

「……輝いているかね？」

「輝いてるよ、美輝は。小学生のころ友達がいなかったこいつが今では、一つ年上だけど友達……俺から見たら親友かな？」

「……そうか、仲良しができたか」

「……ええ」

「そうか、それはよかった」

知恵はそう言っで自分の主人の仏壇に向かった。

「……しくじりおつて。何のためにサソードゼクターを渡したと思っっている」

自宅に向かう愛音を見続ける男がいた。

「仕方ない、次の一手だ」

## 第八話 初めてのファイナルフォームライド（後書き）

### 次回予告

男子生徒「お前、どうせ養いきれなくなつたから弟捨てたんだろ！？」

愛「残念ね」

？「宇宙キタ

（。。）

！！」

藤「カブト編終了です！」

愛「なんか謎が残ってる気がするんだけど？」

藤「気にしない気にしない」

愛（ギロツ）

藤「……冗談です。また別の機会に説明できるよう頑張りたいです」

愛「あと受験勉強！！」

藤「……………」

愛「願書出すまで確かあと……3ヶ月？ お前大丈夫か！？」

藤「……頑張ります。でも息抜きに出ってきます、はい」

愛「……ま、いつか。それではまた次回！！」

藤「予告から予想つく人もいるよね？」

## ちよつとここでキャラ説明

キリがいいんでキャラ説明入ります。

愛「嫌な予感しかしませんけど?」

美「それにまだ3人しか……」

総「……大丈夫か?」

……心配無用!

神谷<sup>かみや</sup> 愛音<sup>アノン</sup>

本作主人公。誕生日は2月14日で年齢は16の高校二年生。母親は5年前に逃げ、父親は他界しているので現在一人暮らし。ワームに殺され天界に行ったところ、丁度弟の聖夜<sup>ノエル</sup>が転生するところを目撃。そしてまた彼女も「仮面ライダーの世界」と繋がった現実世界にて再び蘇り、「仮面ライダーデューバー」として戦うことになった。

かなりのオタクで「聖夜がいるから」と言って男を振りまくるブラコン。時折冗談でもヤバイ発言をする。友達は絶対に見捨てず、悪人はことごとく潰す。

ちなみに、普通のはずなのにバストアップという言葉に弱い。

天道 てんどう 美輝 ミキ

16歳の高校一年生、誕生日は4月18日。諸事情から仮面ライダーカブトに変身する。自らを「天の道を往き、美しく輝く女」と称する。

いつの日からか愛音を先輩と呼び、よく行動をとにする。総司とそのおばあちゃん曰く「初めての友達」。だが、微妙に禁断の恋愛感情が入り混じっている。

なぜ彼女が愛音に懐いたのか、どういった経緯でカブトゼクターを入手したのかは謎。

天道 てんどう 総司 そうじ

24歳で美輝の兄。一年前に失踪したが再び戻ってきた。ガタツクの変身者。自らを「天の道を往き、総てを司る男」と称する。詳細は不明だが愛音と美輝の絆を救った本人でもある。

はい、これでいったん終了です。

次回からまた本編に戻ります。

## 第九話 不・良・野・郎

フィロキセラワームとの戦いが終わってから一週間後……。

「え、瀬戸瀬が解雇<sup>クヒ</sup>？」

愛音はその話をクラスメイトの桐野亜矢から聞いていた。

「そうそう」

「で、でもなんでまた……」

「そりゃ、やっぱあれでしょ？ 先週のワーム騒ぎ。あのときあの先生あんたを置いて逃げちゃった上に、あんたは重症だったからねえ」

亜矢は淡々と話した。

「……じゃあ、瀬戸瀬の代わりに誰か新しい人が入ってくるの？」

「うーん、そこはどうなんだろう？ まだ情報はないのよ」

「そうなんだ。……あ、あたしそろそろ委員会行かなきゃ」

愛音は話を切り上げ、クラスを出ようとした。

「そっか、じゃあ行ってらっしゃい。それから、変なスイッチ見つけても絶対に押すなよー！」

変なスイッチ？

愛音は一瞬疑問に思ったが、時間がないことに気づきいそいで図書室に向かった。

~~~~~

愛音が図書室についたところ、すでに図書委員会の会議は始まっていた。

「神谷、遅いぞ！！」

そう怒鳴ったのは高校三年で図書委員長の赤西佐鳥^{さとじ}。

「ごめんなさい！！」

愛音はそれだけ言つと、席についた。

「それでは、全員集まったので始めたいと思います！」

こうして佐鳥の指揮のもと、会議が進められていった。

~~~~~

会議が終わり、教室に戻ろうとした愛音を呼び止める者がいた。

「せんぱーい!!」

仮面ライダーカブトこと天道美輝だ。

彼女も図書委員なのである。

「一緒に行きま〜 (ドンッ) キャッ!」おい、おめえ確か神谷とかいったよな?」

美輝を突き飛ばし、愛音の前に出たのは男子生徒3名だった。

「お前、確か弟がいるよな?」

「……いるけど、どうして?」

「その弟がよあ、この前俺たちにケンカ売ってきたんだ。んで、ぼこぼこにしていきやがった」

「お姉さんよあ、どう落とし前付けてくれるんだあ?」

「……あら、それはごめんなさい。行こう、美輝」

愛音はそう言っつて美輝の手を引いて歩こうとした。しかし……

「「「おいおいおいおいおいおい」」」

不良3人は愛音たちの前に回りこんだ。

「謝ればすべて済むとでも思ってるのかあ!?!」

「はぁ……わかったわかった」

愛音はすつと両手を挙げた。

「せ、先輩……」

「でも、美輝は関係ないでしょ？ 彼女を見逃してくれればあなたたちの要求を呑み込むわ」

愛音は美輝の背中を押した。

「ルールなんて破って、走って」

「せんぱ……！」

美輝は愛音の目を見ると、唇を噛んで走っていった。

美輝の姿が見えなくなったことを確認すると、愛音は口を開いた。

「で、あたしは何をすればいいの？」

すると、不良のうち一人が言った。

「体育倉庫に來い」

~~~~~

体育倉庫にはあまり人が来ない。

さらに今日は今後の授業で使われないので、誰一人として来るはずがない。

そんな場所に3人の不良男子と女子高生が一人……この状況から自分がどうなるのか愛音は計りかねていた。

「……で、こんなところで何するつもり？」

「そりゃ決まってるでしょ。弟に謝罪させる代わりにあんたに身体で謝ってもらおうってことよ」

やっぱり、そう思った愛音はどうやってこの状況を打開しようか考えた。

「へっへっ、俺たち全員に回してくれりゃそれで十分だからよお！」

不良のうち一人が愛音の服を掴んだ。

「！どこ掴んどるんじゃおのれらあああああ！！！」

その時、愛音はその不良の腕を掴み、背負い投げをした。

投げられた不良は無様に床に叩きつけられた。

「なっ……！！」

「残念ね、聖夜は一ヶ月前に親戚の家に行ったのよ。もしそれ以前の話のなら、あんたたちはもっと早くにあたしに訴えたでしょうね。つまり、あんたらが言っていることはすべて嘘！」

「くっ……！」

「お前らのやっていることは、すべてお見通しだー！」

愛音は人差し指で不良どもを鋭く指差し、どこぞのマジシャンのセリフを言い放った。

「だ、だがもしそれが本当だとしたら……」

「そうだな。どうせお前は養いきれなくなったから弟を捨てたんだろー？」

「……なんだとッー！」

愛音は鬼のような顔で残り2人の腹に膝蹴りを喰らわせた。

「うぐっ……！」 「ガッ……！」

顔を元に戻した愛音は倉庫の扉に向かった

「じゃ、そんなわけであたしは逃げるね」

愛音は扉に手をかけ、カギを開けた。

すると

「ざけんなよっー！」

叩きつけられたのとは別の不良の一人が、ポケットからスイッチの

ような物体を取り出した。

（！ あれは……！！）

「お、おい、使うのか！？」

「今使わないでいつ使うんだよ！！」

不良はスイッチを押した。

すると不良の体は黒い霧のようなもので覆われ、その姿を変えた。

それは獵犬座の怪人、ハウンドゾディアーツだった。

「ゾ、ゾディアーツ！？ しかも見たことがな……！！」

愛音が叫ぶよりも早く、ハウンドゾディアーツはその武器である鎖を振り回し、愛音を攻撃した。

「キャッ！！」

愛音は外に吹っ飛び、地面に直撃した。

「怪人なら……容赦しないわよ！！」

愛音はディオーバードライバーを左手に持った。

しかし……

「ウラァッ！！」

「え……キャッ！」

ハウンドゾディアーツの攻撃が左手に直撃し、その衝撃でディオードライバーを落としてしまった。

そしてハウンドゾディアーツはそのスピードを活かし愛音のところまで移動、そして右手に握りこぶしを固めた。

やばい、愛音は本能でそう感じ取っていた。この声が聞こえるまでは……。

『ロケット ON』

「ライダーロケットパアアアアアアンチ！！！」

どこからともなく、右腕にオレンジ色の物体を取り付けた白いライダーが、ハウンドゾディアーツにもすごいスピードで突進した。

「なっ！！！」

ハウンドゾディアーツはそれをもろに喰らい、倉庫の扉よりも少し上まで吹っ飛ばされ、壁にぶつかり、落ちた。

「うおっしゃ！ ……宇宙キタアアアアアアア！」

白いライダーは一瞬しゃがむと、そう叫びながら両腕を空に大きく挙げ、立ち上がった。

「……フォーゼ？」

愛音はライダーにそう聞いた。

「おう！ って、逃げられちまったか……」

「フォーゼ」と呼ばれたそのライダーは、敵が逃げたことを確認すると、ベルトのトランススイッチをOFFにして変身を解いた。

「え……！」

その姿を見た愛音は啞然とした。

なぜならその変身者は、この高校の不良グループの中でも、特にボスに気に入られている男・佐久間空^{ソウ}だったからだ……。

第九話 不・良・野・郎（後書き）

次回予告

愛「なんでこんな不良なんかと！」

亜「はいはいそこまで」

空「俺は、降りる！！」

藤「フォーゼ登場です！！」

愛「あれ、今回の登場早くない？」

藤「ま、ストーリー的にね」

愛「でもまだフォーゼ自体始まって間もないよ？」

藤「そこは、気にしない」

愛「いいのかよそんなに！！」

藤「はい、気にしない気にしない」

愛「……ところで、どうして不良なの？」

藤「ん？ フォーゼ本編の弦太郎から」

愛「ただ単に名前変えただけかい！！」

藤「いや、違うよ。似てるとこもあるけど基本設定はまったく違うから」

愛「つたく」

藤「では、また次回！！」

愛「受験勉強しろ！！！」

藤「すみませんすみませんすみません！！！」

第十話 部・活・勸・誘（前書き）

今更ですが、作中時間軸はあまりテレビ放送（フォーゼはまだ放送していなかったなど）を気にしませんので、そのつもりでお願い致します。

第十話 部・活・勸・誘

ハウンドゾディアーツが逃げ、フォーゼが変身を解いた後、愛音はクラスに戻った。

自分の机で頬杖をつき、先ほどのことを思い出していた。

(……さっきのように変身できなくなるてことを考えると)

愛音はそう考えると、その場でディオードライバーを右腕に装着した。

ディオードライバーは端から見るとただのデジタル時計にしか見えない。このまま装着していても何の違和感もない。

その時、教室の扉が開いた。

「チャーツス!!」

それを見た全員の表情が凍りついた。特に愛音は。

理由は簡単だ。そこにいるのが佐久間空だからだ。
ワケ

「神谷愛音ってなあ、どこだ?」

「神谷……?」

愛音以外の全員が愛音を一斉に見た。

なぜあたしを呼ぶ。愛音はそう思いながらも立ち上がり、空のところまで行った。

「……何」

「ちょっと用があつてなあ。すまんが来てくれないか？」

「だが断る!」

「お前に拒否権はない!!」

「ねえのかよ!!」

そんな口論が終わると、愛音は渋々と空についていった。

そのやり取りを見ていた者は全員、目を点にしていた。……約一名を除いては。

~~~~~

教室を出た二人は、今はもう使われていない部屋の中の、これまた今はもう使われていないロッカーの前に来ていた。

「……こんなところで何する気？ まさかあの連中と同じこと考えてんじゃないでしょうね」

「アホウ、俺がそんな男に見えるか!？」

「うん、見える。ていうかあんたもあいつらの一味だもん、信用できるはずがない」

「カーーーッ！ わからねえやつだな！！」

空はそう叫ぶと、愛音の腕を掴みロッカーの扉を開けてその中に愛音突き飛ばし、それに続いて空もその中に入った。

「キャッ！ ちょ、何するのよ！！」

「いいから進め！」

ロッカーの中は不思議な空間だった。その視界の先には鉄の扉が見える。

二人が扉の前に立つと、それに反応して扉が開いた。

「入れ」

「……………」

愛音は何も言わずに、扉の奥にある部屋に入った。

扉の奥はとても広く、部屋と言うよりは家と言ったほうがいいだろう。

壁は白い鉄のような造りになっている。その壁にはフォーゼの頭部と「仮面ライダー部」とデカデカとプリントされた旗が貼られている。

る。

そして真ん中にある机と一緒に設置されているイスに、一人の女子が座っていた。

「あら、お帰りなさい。……て、神谷!？」

「亜矢!？　なんであんたがこんなところに!!?」

「なんだ、おめーら知り合いだったのか」

「ねえ、まさかこの不良にバッドボーイそそのかれたんじゃないでしょうね?」

空の言葉を完全に無視し、愛音は言った。

「……あたしがそんな簡単にそそのかれると思う?」

「じゃ、じゃあなんでこんなところに……!」

「あれ?　まさか空、まだ言っていなかったの?」

「ん、ああ」

空はおもむろにそう答え、その後亜矢が愛音にこう言った。

「あたしたち、付き合ってるのよ」

「……え?」

その言葉を、愛音はすぐに理解することができなかった。

「まあ、今回はそんなことどうでもいいわけだな」

「……じゃあ、何よ？」

愛音が聞くと、空は気恥ずかしそうに右手を額に当てて言った。

「さっきお前の前で変身解いちゃって、正体ばらしちまったからな」

「だから？ まさかその口封じ？」

「んなことするようなやつに見えるか？」

「見える」

愛音は即答し、入り口を見た。

「……用がないなら、あたし戻るけど？」

「……ああ、協力する気がないならさっさと帰れ」

ふと部屋の奥から男子生徒の声がした。

その男子はコンピューターを前にしていた。

「おい賢<sup>ケンリ</sup>李！ その言いかたはねえんじゃねえのか！？」

「うるさくて集中できなかったから言っただけだ」

「お前なあー！」

「ええ、そうね。こっちからも願ひ下げよ!!」

愛音も声を張り上げ、言い争いが始まるうとしたその時……

「はいはいそこまで。空、言いたいことさっさと云っちゃいなさい、ややこしいことになりそうだから」

亜矢が割り込んでそれを未然に防いだ。

「じゃあ、一言聞け。……仮面ライダー部に、入れ!」

突然の誘いに愛音はつい「はあ!？」と声を張り上げて平然とした顔の空を見た。

「どうだ?」

「……なんでこんな不良なんかと同じ部活に入らなきゃならないのよ!」

そう怒鳴った愛音は、一目散に扉をくぐり、ロッカーから外に出た。

「……ようやく静かになった」

賢李は再びコンピュータに向かった。

「……嫌われちゃってるわね」

愛音が見えなくなったのを確認し、亜矢が言った。

「そうか？　だがますます気に入ったぜ！」

「……あのう」

一室の隅から顔を出し、彼らに話しかけた者がいた。

「あら、どうしたの？」

「……私も、協力しましょうか？」

~~~~~

その日の授業がすべて終了したが、愛音は上の空だった。

教室には彼女を除いて誰一人として残っていない。

（……そろそろ帰るかな？）

愛音はようやくそう決心すると、カバンを持って席を立った。

そしてドアをくぐり教室の外に出た瞬間、目の前に謎の男が現われた。

その男はメガネをかけ、コートとフェルト帽を身に着けていた。

「……デイオーバーよ、貴様はここで終わるのだッ！」

男は唐突にそう叫んだ。

「……あんた、鳴滝ね？ まさかディケイドと同じように、あたしも始末しようとか考えてるんじゃないでしょうね？」

「いかにも、そうだ！」

鳴滝と呼ばれたその男はそう白状…いや、そう言った。

「美輝にあたしを消さねば兄が消えるとか吹き込んだのもあんたね？」

「そうだ！ 貴様は悪魔なのだ破壊者なのだ！！」

「……あつそ。そろそろそこどいてもらえるかしら、邪魔」

「ああ、いいだろう。だがディオバー、貴様は今日で終わりだ！！」

鳴滝はそう言い残し、その背後に突如現われた灰色のカーテンの中に消えていった。

「……今日で終わりって、どういう意味かしら」

~~~~~

「……悪いが、俺は降りるぜ」

自分が属しているグループの溜まり場にて、空はメンバー全員に向

かってそう言った。

それを聞いた場は一気にざわついた。

「……おい、佐久間。てめえ、どういっつもりだ!？」

リーダー格の男が空の胸ぐらを掴み、怒鳴った。

「俺は、降りると言ったんだ。理由があると言ったら、飽きた」

空は彼の胸ぐらを掴むリーダーの手を振り払い、カバンを持ってその場を立ち去ろうとした。

「……あの胡散臭い預言者の言うとおりだったなあ!」

リーダーの横にいた一人が、黒いモノ……アストロスイッチを取り出した。

『ラストワン』

アストロスイッチはそんな声を出し、その姿をおぞましく変えた。

それを見た空は絶句した。

「やめろ! 完全に怪物になっちまうぞ!」

「かまうな」

スイッチャーの男がスイッチを押すと、その身体は獵犬座のハウンドゾディアーツとなり、人間としての肉体が蜘蛛の巣のようなもの

で覆われ、その場に倒れた。

「スゲエ……スゲエよ、これ!!」

ハウンドゾディアーツはその姿を確認すると、叫んだ。

「畜生!!」

空はカバンからフォーゼドライバーを取り出し、それを腰にセットしようとした。

「まで。お前が最近、スイッチャーを消している仮面ライダーだというのは既に知っている。そこでだ……」

リーダーはその背後にある黒いカーテンを引っぺがした。

「な……! 貴様ア!!」

「変身したら……どうなるかわかるよな?」

リーダーの男はそう言うと、他のとは少し形態の違うアストロスイッチを取り出し、それを押した。

彼を包む黒い霧にサソリ座が映り、その姿はスコピオンゾディアーツとなった。

## 第十話 部・活・勸・誘（後書き）

### 次回予告

空「う……るせえ……！」

美「佐久間さんのところに！」

愛「行くわよ……一緒に……！」

藤「今年度最後となりました！」

愛「なんか、中途半端ねえ……！」

藤「そこは気にするな！」

愛「……にしてもまさか亜矢とあの不良が付き合っていたとは！」  
バッドボーイ

藤「なんか疑問あり？」

愛「……いや、特には」

藤「ないの……！」

愛「これ以上話すこともない」

藤「……そ。では、また次回！」

## 第十一話 不・良・少・女

鳴滝との接触後、愛音は下駄箱にいた。

靴を履き替え、校舎を出ようとした彼女はふと、なんとも言い難い違和感を感じた。

そしてその違和感の正体はすぐにわかった。

背後からカシャン……カシャン……と錫杖を突くような音がした。

愛音が振り返ると、そこにはカミキリムシのような怪人、リブラゾディアーツが愛音に向かってゆっくりと近づいていた。

愛音はそれが何なのか、わからない。

「何者！」

愛音はすでに右腕に装着しているディオオーバードライバーを構え、ディオオーバーのカメンライドカードを取り出した。

「……………」

リブラゾディアーツは両腕を大きく広げると、自分の胴体から何十もの分身・星屑忍者ダスタードを創り出した。

「何よ、こいつら！ 変身！！」

カードをドライバーにセット、そしてスイッチを押した。

『カメンライド デイ・オーバー!』

愛音がデيوオーバーに変身するのを確認すると、リブラゾディアーツはダスタードたちを残してどこかに消え去った。

それと同時にダスタードたちも攻撃を開始。手に持ったダスソードで次々にデيوオーバーに斬りかかった。

「とつ、危ない!」

デيوオーバーはギリギリで避けつつカードを1枚取り出し、ドライブバーにセットしてスイッチを押した。

『カメンライド ガタック!』

電子音が鳴り、デيوオーバーの姿はガタック・M<sup>マスクド</sup>となった。

「マスクドフォーム!? デイケイドはライダーフォームだったのに……あ、ベルトにガタックゼクターが」

そう、デيوオーバーはデイケイドとは違い、ベルトまでも同じになる。それ故にフォームチェンジ、必殺技にカードを必要としない。

「……キャストオフ」

愛音はガタックゼクターのゼクトホーンに指をかけ、反対方向に倒した。

『キャストオフ チェンジ・スタッグビートル』

ディオーバー  
Dガタック・Mはその装甲をすべて吹っ飛ばすと、Dガタック・R  
となった。  
ライタイ

「さあて、さっそく行きますか。クロックアップ!」

『クロックアップ』

Dガタック・Rはガタックダブルカリバーを両手に構え、クロックアップを発動。目にも留まらぬ速さでダスタードたちを攻撃していた。

『クロックオーバー』

すべてを攻撃する所にクロックオーバーとなった。

しかしダスタードたちは消滅せず、ただ怯むばかりだった。

「せ、戦闘員でしょこいつら!?　なんで消滅しないの!?!」

クロックオーバーしたDガタック・Rに向かってダスタードたちの猛攻が行われた。

再びクロックアップするにはしばらくの間チャージする必要がある。そのためDガタック・Rはその猛攻を避け続けようとした。

しかしそれはかなわなかった。

ホロスコープス  
もともとダスタードは幹部級ゾディアーツの分身であり、その生体反応は基と同じ。つまり今回の彼らはリブラゾディアーツとほぼ同

じということとなる。

「グアッ！」

Dガタック・Rはその猛攻を諸に喰らってしまい、壁まで吹っ飛ばされた。

「……このままじゃラチがあかない！ 来て！！」

『コールライド オーバードライブ！』

Dガタック・Rはオーバードライブを呼んだ。

しかし、ブロロロロと排気音をあげて昇降口からダスタードの群れを弾き飛ばしてDガタック・Rの目の前に来たのは普段のそれとは違った。

紫のカラーリングが青になり、そのフォームも変わっている。

「……え、なんで？」

その姿は現在デイオーバーが変身している、仮面ライダーガタックの専用バイク・ガタックエクステンダーそのものだった。

「……バイクも変わるって、こと？」

Dガタック・Rはそう言うのとガタックエクステンダーにまたがり、群がるダスタードに突進し突き飛ばしていった。

向かう場所はグラウンドだ。

『ピ……ピ……』

「え？」

昇降口の扉付近でディオーバードライバーから電子音が鳴った。

『ピ……ピ……』

グラウンドに出たDガタック・Rはふと腕のドライバーに目をやると、その画面に「5」というデジタル文字が浮かんでいて再び「ピ……」と鳴ると、その数字は「4」となった。

「何、何のカウント！？」

そう言っている間にもカウントは続き……

『ピーッ！』

といままでよりも一際大きい音がした。

すると、Dガタック・Rの姿はディオーバーに、ガタックエクステンダーはオーバードライブに戻った。

「え！？」

突然のフォームチェンジにより、バランスを崩したディオーバーはオーバードライブごと倒れてしまった。

そこにダスタードは一斉に襲い掛かった。

しかし、ディオーバーとダスタードの間に高速で動く赤い物体が現われ、ダスタードを一掃していった。

先のDガタツク・Rによる攻撃もあつた為か、ダスタードたちはほぼ半数以上消滅していった。

『クロックオーバー』

「大丈夫ですか、先輩！」

クロックアップの世界から出てきたカブトはディオーバーの前に立つと、彼女を抱き起こした。

「ええ大丈夫よ、ありがとう」

「ならいいのですが……それよりも先輩、お願いがあります」

「……何？」

「佐久間さんのところに、行ってあげてください」

「……はい！？　なんであたしがあいつのところに行かなきゃならないのよ、ていうか美輝には関係ないじゃん！」

ディオーバーは声を張り上げて言った。

「いえ、同じライダー同士、放っておけません！」

「ったく、なんであたしがあの不良と！？」  
バッドボーイ

「……佐久間さんが不良なら、先輩は不良少女じゃないですか！」

バッドボーイ

バッドガール

「……はい？」

「だって先輩、前に言ってたじゃないですか。『人を悪く言う人間は不良だ』って。今の先輩、佐久間さんのことを悪く言いすぎです」

「……………」

デイオーバーは少し考えた後、カブトに言った。

「あいつは今、どこにいるの？」

「旧校舎の体育館です！ 急がないと大変なことになるかもです！」

「ありがとう、美輝！！」

そう言い残したデイオーバーはオーバードライブにまたがると旧校舎に向かった。

~~~~~

「ぐあっ！」

「空！！」

亜矢を人質に取られ、変身する事ができない空はハウンドゾディア

ーツによる猛攻を諸に受けている。

「お前もバカなやつだな。降りるなんていわなければ見逃してやったものを」

スコープオンゾディアーツは自身の持つ毒針を亜矢の首もとの押し付けながら言った。

「う……るせえ……!!」

「ああ!? 今、なんか言ったかあ?」

ハウンドゾディアーツはそう言うと、鎖を空に叩きつけた。

「ぐっ……!!」

「……もういいだろう、そろそろ殺せ」

スコープオンゾディアーツはハウンドゾディアーツにそう言った。

「……いいんですか?」

「かまわん。俺たちの計画を邪魔するやつがいなくなるんだ」

「へ……へへへへへ!!」

ハウンドゾディアーツは鎖を今までよりも激しく振った。

「グアアアアアアアアア!!」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」

空は断末魔の叫びを上げ、ハウンドゾディアーツは狂喜の笑いをあげた。

「名残惜しいが……消えろ!」

スコピオンゾディアーツは毒針を亜矢から離し、空目掛けて素早く伸ばした。

その瞬間を見たのか、バイクで壁を突き破って体育館に侵入してきた者がいた。

それはハウンドゾディアーツを吹っ飛ばすと今度はスコピオンゾディアーツに突進し、亜矢を救出した。

「大丈夫?」

「え、ええ」

デイオーバーはオーバードライブから降りると、1枚のカードをドライバーに入れた。

『フォームライド オーバードライブ・オートモード!』

「亜矢を、外に避難させて」

オートモードに変形したオーバードライブにそう命じ、デイオーバーは空のほうを見た。

「……ごめん、あたし、あんたのこと誤解してた」

「？」

「ただの不良だと思ってたけど、あんたは亜矢のことを大切に思っている。ただ付き合ってるってだけならここまで体張らないでしょう？」

「……お前、神谷か？」

デイオーバーは空のもとに歩み寄り、右腕を伸ばした。

周りにいる人間はよくわからない行動と思ったが、空はその意味をわかり、フォーゼ本編でお馴染みのあの拳骨握手をした。

それが終わると同時にライドブッカーから4枚のカードが飛び出した。

「行くわよ……一緒に!!」

「ああ!!」

空はフォーゼドライバーを取り出し腰にセットした。そしてトランススイッチを右から順に上げ、右手をレバーにかけ、左腕を右にまげた。

『3……2……1……』

「変身!!」

カウントが終わると空はレバーを引き、仮面ライダーフォーゼへと変身を完了した。

「宇宙キタアアアアアアア！！！」

フォーゼは一瞬しゃがみ、そう叫びながら両腕を空に大きく挙げ、立ち上がった。

「くっ……」

「仮面ライダーフォーゼ、タイマン張らせてもらっぜー！」

フォーゼはハウンドゾディアーツを右人差し指で指し、言い放った。

「タイマンじゃないわよ」

「……いや、わかってるけど決めゼリフなんだから！！」

そんなやりとりを見ていたスコープオンゾディアーツはハウンドゾディアーツに耳打ちした。

「ここはお前に任せる。俺はやらなきゃならないことがあるからな」

「了解しました」

「……おめーら、退いていいぞ！」

周りで見物していた不良たちは、その言葉を聞くと一斉に散らばっていった。

「さて、これで周りに気を使わなくて済むな」

「そうね……じゃ、一気に攻めるわよ！」

デイオーバーとフォーゼはお互いに頷きあい、ハウンドゾディアーツ目掛けて突進した。

第十一話 不・良・少・女（後書き）

次回予告

バッドガール

愛「あたしも不良少女なんだけど」

空「な、なんじゃこりゃ!？」

『ファイナルアタックライド』

藤「次回、フォーゼ編終了予定です!」

愛「今回は案外早いわね?」

藤「そうか? デイケイドなんて2話でそれぞれ完結だぞ?」

愛「テレビ放送と同レベルで考えるなバカ」

第十二話 超・空・融・合（前書き）

ちなみに愛音がフォーゼに関して知っているのはユニコーンズデ
ィーツまでです。

第十二話 超・空・融・合

『アタックライド スラッシュ!』 『チェーンソー ON』

「だりやあああ!」 「おるあああ!」

デイオーバーはソードモードのライドブッカーを、フォーゼは右脚に装着したチェーンソーモジュールを使ってハウンドゾディアーツを何度も斬りつけた。

ハウンドゾディアーツの体から火花が散った。しかし彼は怯むことなく両腕を大きく広げた。

「グ……アアアアアア!」

すると全身から針のようなエネルギー弾が大量に放たれた。

デイオーバー並びにフォーゼはそれを諸に喰らい、吹っ飛んだ。

「くっ……あんなこともできるなんて!」

「だったらこっちもお返しだ!」

『ガトリング ON』

フォーゼは左脚にガトリングモジュールを装着し、それをハウンドゾディアーツ目掛けて一気に放った。

「ガアアアアア!」

ガトリングモジュールの弾は秒速で数十発もの量を発射できる。

「だったらあたしも！」

『アタックライド ブラスト！』

デイオーバーもそれに便乗し、ライドブッカーから紫色の弾を一斉に放った。

「知ってるか？ 便乗って不良のやることだぞ？」

「知ってる？ あたしも不良少女^{バッドガール}なんだけど」

フォーゼはその言葉を聞いて苦笑した。

すると、体育館の外から話し声が聞こえた。

「亜矢、佐久間はどこだ！？」

「賢李！ 空なら中よ！！」

外でオーバードライブに保護されている亜矢に空の居場所を聞いた賢李はスニーカーを手にも、デイオーバーが壊した壁をくぐって中に入った。

「佐久間！！ それと……新しいライダー！？」

「お、賢李！」

フォーゼは賢李の方を見た。それにより大きな隙が現われ、ハウンドゾディアーツに攻撃のチャンスを与えてしまった。

「ちょ、余所見すんな…ガッ！」

「のわっ!!」

ディオバーとフォーゼはともに鎖による攻撃を喰らい、後ろに吹っ飛ばされてしまった。

賢李はカメラスイッチをセットしたバガミールを取り出し、スーツケースに設置されたコンピュータでハウンドゾディアーツの生体を調べた。

そしてどこからともなくNo.10のスイッチを取り出し、フォーゼに投げ渡した。

「新スイッチだ!!」

「お、サンキュ！ No.10か、そういやこれだけ抜けてたもん
な」

フォーゼはそれを受け取り、ロケットスイッチと取り替えた。

『エレキ！ エレキ ON』

フォーゼの体は電流のようなもので包まれその姿は金に、右手にはビリーザロッドが装着された。

これが、フォーゼ・ES。
エレキスイッチ

「おお、電撃パワーがビリビリ来るぜ!!」

「そうか、エレキスイッチはステイッチエンジの力を持つスイッチだったのか」

「カタカナ多い!」

デイオーバーはそう言いつつ、ブラストをハウンドゾディアーツ目掛けて連射した。

フォーゼ・EDもビリーザロッドで斬り、ハウンドゾディアーツに電流を流しながら攻撃していった。

「さて、そろそろ行くか……!」

(結局あれは使わずじまいか……)

『ドリル! ドリル ON』 『ファイナルアタックライド……』

フォーゼ・ESはガトリングスイッチをOFFにしてドリルスイッチと入れ替え、デイオーバーは1枚のカードをドライバーにセットした。

「くっ……すまねえリーダー!!」

ハウンドゾディアーツはその身のこなしを利用し、体育館からの脱出を試みた。

そしてその際にジャンプしたのを、二人は見逃さなかった。

フォーゼは背中についているブースターを利用したホバリングでジャンプし、レバーを引いた。それと同時にデイオーバーもドライブのスイッチを押した。

『エレキ・ドリル リミットブレイク!』 『デイ・デイ・デイ・デイオーバー!』

「ライダー電光ドリルキック!」 「はあああああああ!」

電流を帯びたフォーゼのドリルモジュールとデイオーバーのデイメソングソナックルがハウンドゾディアーツを貫いた。

「ギャアアアアアアアアア!」

ハウンドゾディアーツは爆破したが、ゾディアーツスイッチは出てこなかった。

さらに爆破した際に出てきたくろいきりのようなものが再びハウンドゾディアーツの形をかたどった。

「なっ、ラストワンだろ!」

「ラストワンを、超えたのか……?」

「ラストワンを!」

3人が驚いていると、復活したハウンドゾディアーツはエネルギー弾での攻撃を開始した。

「ぐあつ！」 「キャッ！」

賢李にはギリギリ当たらなかったが、残りの2人はそれを喰らい、のけぞった。

「なんか、さっきよりも威力が強まってないか？」

「言われてみれば……」

「ラストワンを超えた結果だろう。ラストワンを超えたことにより、ゾディアーツ本来の力が最大限にまで上げられたのだろう」

2人の疑問を、コンピューターのスクリーンを見ながら賢李が言った。

「ウラアアアアアアア！……」

ハウンドゾディアーツは鎖を振り回してフォーゼを攻撃した。

「グワッ！……」

フォーゼはスイッチチェンジをする暇もなく、その攻撃を左腕ではじいた。しかしその威力はいままでと比べ物にならないほど強く、フォーゼは火花を出しながら吹っ飛んだ。

「佐久間！ こうなったら……！！！」

ディオーバーはカードを1枚取り出し、ドライバーにセットしてスイッチを押した。

『ファイナルフォームライド フォ・フォ・フォ・フォーゼ!』

「人によつては気持ちいいかも」

デイオーバーは倒れこんでいるフォーゼの背後にまわると、その背中を強く押した。

「何をす……グアッ!」

するとフォーゼの姿は変形し、一つの巨大な白いロケット・フォーゼロケットとなった。

『な、なんじゃこりゃ!』

「ロケットが喋るな!」

「フォーゼが……変形した?」

デイオーバーはフォーゼロケットについている取っ手を右手で掴み、持ち上げた。

「へえ、フォーゼはこうなるんだ」

『ちょっとまで、俺をどうしようってんだ!』

フォーゼロケットが叫ぶと、ハウンドゾディアーツはデイオーバーに襲い掛かってきた。

「どうもどうも、こうすんのよ!…!」

デイオーバーはフォーゼロケットの先端でハウンドゾディアーツを殴り、吹っ飛ばした。

『ちょ、痛え！』

「よし、ドンドン行くわよ！！」

デイオーバーはフォーゼロケットを構えると低くしゃがみ、そのまま突進した。

「おおおおおおお！！！」

フォーゼロケットのジェット噴射を利用したロケットパンチがハウンドゾディアーツに直撃した。

「グアアアアア！！！」

『だから痛えつつてんだろ！！！』

フォーゼロケットは騒ぐが、無視。

「じゃ、今度はこれ！」

デイオーバーはまた別のカードを1枚取り出し、ドライバーに入れた。

『ファイナルアームドライド フォ・フォ・フォ・フォーゼ！』

『今度はなんだあ！？』

フォーゼロケットはデイオーバーの右手を離れるとさらに変形し、デイオーバーに装着された。

デイオーバーは白いロケットを基^{ベース}とした鎧で包まれ、ベルト部分はスイッチのないフォーゼドライバーとなった。

そしてカブトのときと違うのは、デイオーバードライバーは仮面ライダーガイのように左肩に移動し、それがあつた右腕には○、右膝には×、左腕には□のマークがついていた。

これがデイオーバーとフォーゼの融合体、デイオーバー・AF^{アームドフォーゼ}だ。

「今度はフォーゼを装着しただと……？」

（いや、さっきよりは楽だけどスイッチがねえってどういうことだ！？）

それに関してはデイオーバーにも考えがない。しかし、先日のカブトとの共闘を思い出していた。

あの時は、イメージでクロックアップしていた。

「……イメージよ、佐久間！」

（い、イメージだあ！？）

「そうよ、前に使ったときもイメージでなんとかいったの……！」

（……たく）

デイオーバー・AF内の空は普段使っているロケットモジュールをイメージした。

すると、

『ロケット ON』

電子音が鳴り、デイオーバー・AFの右腕にロケットモジュールが装着された。

「よっし！」

（本当にできたのか！？　じゃあ……！）

「ふえ！？」

デイオーバー・AFの身体は愛音の意思とは別に動き、ロケットモジュールのジェット噴射を利用したロケットパンチでハウンドゾディアーツをまたも殴り飛ばした。

「……そろそろドメさそうか？」

（……だな）

『ドリル ON』

今度はドリルモジュールをイメージし、それが左脚に装着された。

そして1枚のカードを左肩のドライバーに入れ、スイッチを押した。

『ファイナルアタックライド フォ・フォ・フォ・フォーゼ!』

「(はああああああ!!)」

デイオーバー・AFはロケットモジュールの力で空中に飛んだ。

そして「ライダーロケットドリルキック」のように体を傾けると、デイオーバー・AFとハウンドゾディアーツの間に数枚の半透明なカードがズラリと並び、デイオーバー・AFはそのままそれらに突っ込んだ。

カードに突っ込んだデイオーバー・AFはカード間を瞬間移動するかのように移動していき、最終的にハウンドゾディアーツの目の前まできた。

「(バッドボーイ&ガール デイメンジョンリミットブレイク!!)」

「

「ギヤアアアアアアアア!!」

気づいたときにはすでに遅く、ハウンドゾディアーツはそのまま爆破した。

爆破した際に起こった炎の中からゾディアーツスイッチが飛び出し、デイオーバー・AFの手に渡った。

(よし!)

そのスイッチを押すと、それは一瞬にして消え去った。

「改めて言うわ。誤解してごめん」

変身を解いた愛音は、同じく変身を解いた空に面と向かってそう言った。

「そんなことは正直どうでもいいんだよ。それより、仮面ライダー部に入れ!!」

「ごめん、それは断る」

空の2回にわたる申し出も頑なに断った愛音はバイクモードに戻ったオーバードライブにまたがった。

「なんでだよ？」

「バイトがあるし、学校の外も守らなきゃね。でも、困ったときには呼びなさいよ？ できるかぎり協力するから」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

二人は再び拳骨握手をし、愛音はエンジンをかけた。

「せんぱーーーーーい!!」

すると新校舎のほうから聞きなれた声がし、そこからバイク並みのスピードで走ってくる少女がいた。美輝だ。

「あ、美輝大丈夫だった!？」

「はい、大丈夫です!!」

「いや、誰かその脚力に突っ込めよ!」

賢李の突っ込みを無視し、美輝はオーバードライブの後部座席に乗った。

「ほらお願いします先輩!」

「な、何を?」

「助けてあげたんですから、家まで送ってください!」

カブトエクステンダーはどうした、と愛音は口に出しかけたが、そのままオーバードライブを発進させた。

「そつだ佐久間。明日朝一でラビットハッチに来い。新スイッチがもうすぐ完成しそつなんだ」

「おう、了解!」

賢李はその言葉を聞き、旧校舎を出ていった。

「……ごめんね、空」

「ん、なんのことだ?」

「だから、あたしが人質に取られたせいであんたが死にそうになったこと」

「んなことどうでもいいんだよ。好きなやつを守るためなら、俺はなんだってする」

「……ありがとう」

そう答えた亜矢だが、その表情はどこか悲しげだった。

「じゃ、俺たちもそろそろ行くか」

「……ええ」

二人はともに旧校舎を出た。

「……無理だったか」

美輝と相乗りしている愛音を見続ける男がいた。鳴滝だ。

「デイオーバー、貴様のせいでこの世界……いや全世界は破壊される
！！」

第十二話 超・空・融・合（後書き）

次回予告

？A「久しぶりじゃない！」

愛「いらっしやいませ、お嬢様〜！」

？B「あれ、聖夜はどうしたんだ？」

藤「フォーゼ編終了です！」

愛「あれ、お説教なし？」

藤「ちなみに次回はバトルなしの予定です」

愛「他のライダーは？」

藤「その予定もなし。愛音の日常生活です」

第十三話 愛音の日常

フォーゼの変身者・佐久間空と和解してから6日後の日曜日……。

朝7時35分に目が覚め、リビングに行った愛音はふと、その異変に気づいた。

家中の「仮面ライダー関連」のものがすべてなくなっているのだ。

もちろんそれは愛音が所持するディオーバードライバーやライドブツカーの話ではなく、ビデオや玩具などテレビ放送関連のものが消えているのだ。

「ん〜？」

疑問に思った愛音はすぐさまインターネットに接続、即行で「仮面ライダー」を検索した。

しかしテレビ、映画、音楽、玩具の情報がまったくなく、代わりに出てきたのは目撃情報だ。

「あれ〜？」

この間に8時になった。愛音はすぐさまテレビをつけ、テ。ビ。日へとチャンネルを切り替えた。

しかしその時間にやるはずの「仮面ライダーフォーゼ」が放送されず、代わりに前倒しなのか「スイートプリキュア」が放送されていた。

「……帰れ！」

愛音はそう言ってテレビの電源を切った。

そして愛音は受話器を手に取り、どこかに電話をかけた。

「……もしもし店長？ 神谷です。今日これから、バイトさせてください」

~~~~~

朝食を食べ終え、愛音はオーバードライブに乗って家からそう遠くない場所にある「ハートディッパ」という看板の出ている喫茶店に向かった。

オーバードライブを駐車場にとめ、愛音は準備中のその店に入った。

「お久しぶりです！」

「お、神谷！ ようやく来たか！！」

その喫茶店のカウンターに腰掛けていたメイド服の少女がそこから飛び降りた。

そしてその言葉に反応したかのように控え室からも同じメイド服を着た何人かの少女が出てきた。

「愛音！ 久しぶりじゃない！」

「最近サボつといて……今日はその分も働けよ！」

「ええ、そのつもり！！」

愛音は笑顔で答え、控え室に向かった。

そしてその中でこの店の制服であるメイド服に着替えた。

そう、ここは愛音のバイト先の「ハートディッパ―」という名のメイド喫茶である。

~~~~~

「いらっしやいませご主人様〜！」

開店してからすでに2時間は経った。

ちょうどブレイクタイムなのか、客入りは増すばかりだ。

「アーノン、4番テーブルのお嬢様方に！」

「了解しました！」

愛音は注文された品の乗ったトレイを受け取り、4番テーブルに向かった。

「ごゆっくりお楽しみ下さい」

メイド喫茶と言えば「ご注文の品に魔法をかける」ということで認識している人もいるだろうが、「ハートディッパ―」に関してはそのようなシステムがない。もともとは料理が売りの店なのだ。

それなのになぜメイド服が制服なのか、それは店長の趣味にあった。カランカランと入り口の鈴が鳴った。

「いらっしやいませお嬢様〜！」

愛音はここで働き始めてもう3年。それ故にか客が来ると真っ先に反応し、それに応じた対応を取ることができる。

今回は女子高生の客で尚且つ初回だということが0コンマ数秒で判断できた。

「始めてですね、お一人ですか？」

「……え？」

「どうかなさいましたか？」

愛音は気づいていないが、女子高生は気づいたらしい。目の前にいるのが、自分の敬愛している人間なのだとということ。

「……せ、先輩！ メイド喫茶でバイトしてたんですか！？」

「……ヴェー！？ ヴィギ、アンタドルジデ（美輝^{ミキ}、あんたどうし

て)？」

驚きのあまりオンドウル語になってしまった愛音だったが、すぐに自分の役割を思い出し、後輩を奉仕した。

「ではこちらへどうぞ、お嬢様。御用がお有りならそのベルでお呼びください。もちろん、指名は大歓迎ですよ。ちなみにわたくしの名前は『アーノン』です」

美輝を席に座らせた愛音は去り際に彼女の耳元で囁いた。

(あたしのシフトは2時までだから、そのころにまた来て)

「は……はい！」

まあ、美輝からしてみれば偶然足を踏み入れた喫茶店で愛音がバイトしているという時点で、幸福に酔ってしまう気分だろう。さらにメイド服で、本人からの呼び出しがあつたとなると天にも昇る気分だ。

~~~~~

午後2時、愛音の今日の仕事は終了した。

美輝はやはり来ていて、駐車場に置いてあるオーバードライブに寄りかかるようにして地面に座り込んでいた。

「ごめん、待たせた？」

「いいえ、今来たところです！」

実際には店を出てからずっと座り込んでいたのだが（その間に2回ほど通報されかけたが）、もはや決まり文句みたいなものである。

「それで、どうして私を呼んだのですか？」

「……え〜と、この後空いてる？」

「はい、空いていますか？」

「じゃあ、ちょっと付き合ってください？」

「……え？　ま……ラガバゼゼドデグバ？」

突然の誘いに戸惑った美輝は意味不明な言葉を発した。

「ごめん、グロンギ語で回避してもあたしには意味ないわよ。『まさかデートですか』……まあ、あながち間違ってはいないけど、ちょっと聞きたいことあるからラーメン屋行かないって意味であたしは言ったのよ」

「う、ごめんなさい」

美輝は一言謝ったが、愛音は何のことかまったくわからず、彼女を後部座席に座らせてオーバードライブのアクセルを踏んだ。

~~~~~

二人の少女は「源^{みなもと}ラーメン」というのれんがかかったラーメン屋の前にいる。

二人はオーバードライブから降り、それを所定の場所に駐車した後、のれんをくぐって店の中に入った。

「へい、らっしゃい！」

中にいたのは高校生くらいの朱色の髪の男だった。彼はこの店の店員らしく、カウンター裏で熱湯に浸った網の中に入った生麺を茹でていた。

「よ、久しぶり源^{ゲンイチ}一！」

「ん？……お、おめえ愛音か！ここんとこ音沙汰無しだったじゃねえか！あれ、聖夜はどうしたんだ？」

「それはあとで。それより、今日は後輩も一緒だから、いいもん作りなさいよ〜！」

「おう、わかったぜ。……で、何がいいんだ？」

「えっと……オススメで」

「あたしはいつもので」

二人が注文を終えると、源一は店の奥に消えていった。

二人席に座った二人は、ラーメンができあがるまで話すことにした。

「あの人は？」

「ん？ ああ、源一はあたしの幼馴染よ。家が代々続くラーメン屋で、その腕も大満足！ でも、本人が本当に興味があるのは『チェス』なのよねえ……」

「チェス、ですか？」

「そう。あたしはそこんとこよくわからないんだけど、おじさんの話し聞く限りだと時折サボることもあるらしいわよ？」

「そうなんですか？ ……あ、それよりも聞きたいことって？」

「ああ、それは……」

ちょうどその時、源一がラーメン2丁をお盆にのせて二人のところへ歩いてきた。

「へい、特製源^{みなもと}ラーメン2丁お待ちッ！」

「お、美味しそう〜！」

「美味しそうなんじゃなくて、美味しいんだって」

「本ツ当にいつ来ても美味しい〜！」

このラーメン代は愛音持ちとなった。

~~~~~

「今日はごちそうさまでした!」

源ラーメンを出た二人はオーバードライブで美輝の家のすぐそばまで来ていた。

「いいのいいの。また今度も一緒に行こうね!」

「はい!」

美輝は笑顔でそう言うと、自宅に戻っていった。

その後愛音は再びオーバードライブのアクセルを踏み、家に向かった。

結局、愛音の美輝への質問とはなんだったのやら……。

### 第十三話 愛音の日常（後書き）

#### 次回予告

愛「高校生にもなつて職場体験？」

？「ダメだ……！」

亜「暴走して他人を傷つけてしまうことを恐れる、か」

藤「次回からはまたライダー戻ります」

愛「そのセリフ意味不」

藤「すみません。次回の更新までは間が空きそうです」

愛「受験勉強あるからな」

藤「それでは、また次回」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7045w/>

---

すべてを超える者、ディオーバー ~なぜか選ばれた姉の仮面戦闘期~

2012年1月13日01時51分発行